

にしのびゅう
西ノ別府遺跡

Nishinobyuu Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書29

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

にしのびゅう
西ノ別府遺跡

Nishinobyuu Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書29

2006

宮崎県埋蔵文化財センター



小丸川を望む



SA1出土土器



SA1出土銅錢

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より皆様方の深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、平成11年度から東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本書はその29冊目の発掘調査報告書となります。

本書に掲載した西ノ別府遺跡では古墳時代の竪穴住居跡が確認されました。検出された住居跡は1軒のみですが、多くの土器と銅鏡が1面出土いたしました。出土した銅鏡は重圏文鏡とよばれるもので、九州地方で出土することはめずらしい種類の鏡です。本遺跡の近隣には大古墳群である川南古墳群・持田古墳群が所在し、古墳時代の活発な人々の活動が知られてきました。今回出土しました重圏文鏡は、そのような古墳群とともに川南町の古墳時代を考える上で第一級の資料となり得るものでしょう。

また、本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 宮 園 淳 一

例 言

- 1 本書は、平成16年度に実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う西ノ別府遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
- 3 発掘調査は平成16年12月13日から平成17年3月30日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は、三品典生が作成した。
- 5 空中写真撮影については、有限会社ふじた、出土した銅鏡の保存処理は(株)吉田生物研究所に業務委託した。
- 6 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース等は三品が整理作業員の協力を得て行った。
- 7 本書で使用した遺物写真は三品が撮影した。
- 8 本書で使用した第3図 周辺遺跡図は国土地理院発行5万分の1図「川南」「妻」「石河内」「高鍋」を基に作成した。
- 9 土層断面及び土器の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。
- 10 本書で用いた標高は海拔絶対高であり、方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。
- 11 本書で使用した遺物略号は以下の通りである。
SA…竪穴住居跡 SC…土坑 SE…溝状遺構 SI…集石遺構
- 12 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のよう統一している。
集石遺構…1/30 竪穴住居跡…1/60 土坑…1/20 溝状遺構…1/400
縄文土器…1/3 土師器…1/4 旧石器…1/3・1/4 石畿…3/5
磨石・敲石・砥石…1/3 台石…1/4 銅鏡…1/1
- 13 本書の執筆・編集は三品が担当した。
- 14 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	1
第1節	発掘調査にいたる経緯	1
第2節	調査組織	1
第II章	遺跡の環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第III章	調査の方法と経過	6
第1節	確認調査の概要	6
第2節	発掘調査の方法	6
1	調査の方法	6
2	調査日誌抄	7
第3節	整理作業及び報告書作成	7
第IV章	調査の概要と基本層序	8
第1節	調査の概要	8
第2節	基本層序	8
第V章	調査の成果	11
第1節	旧石器時代の遺構と遺物	11
第2節	縄文時代の遺構と遺物	11
1	散礫	12
2	集石遺構	13
3	剥片集中区	14
4	出土遺物	14
第3節	古墳時代の遺構と遺物	20
1	竪穴住居跡	21
2	土坑	31
第4節	近世以降の遺構と遺物	32
1	土坑	33
2	溝状遺構	33
3	遺構の時期と性格	34
第VI章	まとめ	35
第1節	旧石器時代	35
第2節	縄文時代早期	35
第3節	古墳時代前期	37
第4節	おわりに	39

挿図目次

第1図	川南町位置図	2	第15図	SA1	21
第2図	調査区と周辺地形	3	第16図	住居内土坑、土坑出土遺物実測図	22
第3図	周辺遺跡分布図	5	第17図	SA1出土石器実測図1	24
第4図	確認調査トレンチ配置図	6	第18図	SA1出土石器実測図2	25
第5図	グリッド配置図	8	第19図	SA1出土石器実測図3	26
第6図	基本土層図	10	第20図	SA1出土石器実測図4	27
第7図	第V層出土石器実測図	11	第21図	SA1出土石器実測図5	28
第8図	接合資料出土状況図、接合資料実測図	12	第22図	SA1出土石器実測図	29
第9図	旧石器時代・縄文時代遺構分布図	15	第23図	SA1遺物出土状況図	30
第10図	集石遺構1	16	第24図	SA1出土銅鏡実測図	31
第11図	集石遺構2	17	第25図	SC1・2、出土遺物実測図	32
第12図	縄文時代出土遺物実測図	18	第26図	SC3、出土遺物実測図	32
第13図	縄文時代出土遺物分布図	19	第27図	SE1～5分布図	33
第14図	古墳時代・近世以降遺構分布図	20	第28図	SE6・7分布図、出土遺物実測図	34

表目次

表1	西ノ別府遺跡と尾花坂上遺跡との集石遺構の比較	36	表7	集石遺構構成確計測表	41
表2	SA1出土表分類表	37	表8	旧石器時代石器計測表	42
表3	宮崎県内鏡出土住居一覧表	38	表9	縄文時代早期石器計測表	42
表4	重岡文鏡出土地域一覧表	39	表10	SA1出土石器計測表	42
表5	竪穴住居跡及び土坑計測表	41	表11	SA1出土石器観察表1	43
表6	集石遺構観察表	41	表12	SA1出土石器観察表2	44
			表13	遺構内出土遺物観察表	44

図版目次

巻頭図版1	小丸川を望む	50	図版7	SA1出土石器(1)	51
巻頭図版2	SA1出土石器、SA1出土銅鏡		図版8	SA1出土石器(2)	52
図版1	西ノ別府遺跡近景(尾鈴山方面を望む)調査区全景	45	図版9	SA1出土石器(3)	53
図版2	旧石器調査区、接合資料出土状況 ナイフ形石器・剥片、接合資料	46	図版10	SA1出土石器(4)	54
図版3	縄文時代調査区、SI1～7	47	図版11	SA1出土石器(5)、住居内土坑出土石器 SC2出土石器	55
図版4	SI8～13、SI11配石、SI12配石	48	図版12	SA1出土石器(1～2)	56
図版5	縄文時代出土石器、縄文時代出土石器	49	図版13	銅鏡鏡背、銅鏡鏡面	57
図版6	SA1検出状況、SA1遺物出土状況 SA1貼床面状況、SA1貼床面除去状況 銅鏡出土状況、住居内土坑		図版14	SE1～7、近世以降出土遺物	58

第I章 はじめに

第1節 発掘調査にいたる経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。平成13年3月には、西都～清武間が供用開始となり、都農～西都間は、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成6年度にこの区間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成11年度より宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

西ノ別府遺跡では本調査に先立ち平成16年5月14日から7月14日にかけて確認調査を行った。その結果、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）上面から竪穴住居跡1軒と溝状遺構を検出した。またK-Ah下層の暗褐色土からは集石遺構1基と縄文時代早期の上器片、その下層の褐色土からは後期旧石器時代の接合資料が出土した。この確認調査の結果を受けて、平成16年12月13日から平成17年3月30日まで調査面積4,750mの本調査を実施することとなった。整理作業は平成17年4月から行い同年度に終了した。

第2節 調査組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮園 淳一（平成16～17年度）

副所長兼総務課長 大園 和博（平成16年度）

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫（平成16～17年度）

総務課長 宮越 尊（平成17年度）

主幹兼総務係長 石川 恵史（平成16～17年度）

調査第一課長 高山 富雄（平成16～17年度）

調査第一課調査第一係長 谷口 武範（平成16年度）

調査第一課主幹兼調査第一係長 長津 宗重（平成17年度）

調査第一課主幹兼調査第二係長 長津 宗重（平成16年度）

菅付 和樹（平成17年度）

（調査・調査報告書担当）
調査第一課調査第二係主事 三品 典生（平成16～17年度）

なお、発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際して、東九州自動車道発掘調査指導委員の方々よりご指導・御協力を受けた（敬称略 □内は平成16年度末時点での所属）

調査指導 小畑 弘己〔熊本大学〕
泉 拓良〔京都大学〕
本田 道輝〔鹿児島大学〕
田崎 博之〔愛媛大学〕
柳沢 一男〔宮崎大学〕
広瀬 和雄〔国立歴史民俗博物館〕

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

西ノ別府遺跡(1)は児湯郡川南町大字川南字尾花坂上に所在する。川南町は宮崎県の中央部に位置し、東は日向灘を望み、西は木城町、南は高鍋町、北は都農町と接している。町域の大部分は、西部に位置する上面木山(標高1,040m)から派生した洪積層段丘面からなり、沖積地は町内中央部を流れる平田川河口付近に僅かに見られるのみである。川南町の段丘面は14面に区分され、南から高城・川南・国光原・唐瀬原に大別する事が出来る。

本遺跡は町中央部を流れる平田川と南部を流れる小丸川支流の切原川に挟まれた高城段丘面に位置し、標高は約60mを測る。調査区内は南に向かって緩やかに傾斜しており、南端には東西に谷が入り込む。この谷は隣接する尾花A遺跡との境界となっている。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には以前から多くの遺跡が周知されているが、近年の東九州自動車道関連の発掘調査によってより詳細な様相が分かりつつある。ここでは発掘調査が行われた遺跡を中心に、時代ごとの周辺遺跡について紹介する。

旧石器時代は、川南町後牟田遺跡(2)、虚空蔵免遺跡(3)、中ノ迫第1遺跡(4)、高鍋町野首第2遺跡(5)、持田中尾遺跡(6)がある。前者3遺跡ではA・T下位からの遺物出土が確認されている。持田中尾遺跡からは瀬戸内技法との関係をうかがわせるナイフ形石器が出土している。またこれらの調査された遺跡以外にも大野寅男氏の踏査などによって数多くの旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代遺跡は前述の後牟田遺跡、野首第2遺跡に加え、川南町赤石・天神本遺跡(7)、天神本第2遺跡(8)、上ノ原遺跡(9)、尾花坂上遺跡(10)、高鍋町野首第1遺跡(11)、下耳切第3遺跡(12)などがあげられる。調査されている遺跡の多くは早



第1図 川南町位置図

期の集石遺構と炉穴が中心であり、上ノ原遺跡では14基、尾花坂上遺跡では34基の集石遺構が検出されており、遺物は押型文土器や条痕文土器が出土している。県道整備による野首第1遺跡の調査では集石遺構51基、炉穴59基が確認されている。集石遺構・炉穴以外では天神本第2遺跡の石器製作跡、野首第2遺跡の礫を伴う環状ピット群が確認されている。早期以外では赤石・天神本遺跡から隆帯文土器が出土しており、野首第2遺跡では後・晩期の竪穴住居跡群、下耳切第3遺跡では中期の竪穴住居跡群が確認されている。

弥生時代になると遺跡数は増加し、それに伴い調査例も増加している。前期末～中期初頭にかけての遺跡としては持田中尾遺跡がある。持田古墳群の所在する台地先端に位置し、円形プランの竪穴住居跡やV字溝が検出されている。中期末～後期初頭では湯牟田遺跡(13)で竪穴住居跡3軒が検出されている。後期以降になると遺跡数の増加に伴い、市納上第1遺跡(14)、大内原遺跡(15)、野稲尾遺跡(16)、中ノ迫A遺跡(17)、赤坂遺跡(18)、上ノ原遺跡、把言田遺跡(19)、国光原遺跡(20)、湯牟田遺跡などと調査例も増加している。その中の赤坂遺跡では後期後半～終末期の竪穴住居跡群24軒とともに円形

周溝墓が検出されている。周溝墓は丘陵頂部ないし台地縁辺部に位置し、住居跡群とは隣接しており、両者の関係が注目される。また湯牟田遺跡では多数の焼失住居とそれに伴う多量の炭化材が確認されている。炭化材の多くは建築部材と考えられ、その中には垂木と桁（または梁）と推定できるものもある。遺物では炭化した木製鋤や朝鮮半島製板状鉄斧などが出土している。

古墳時代になると大規模な古墳群が台地縁辺部に築造されることとなる。川南町川南古墳群(21)は西ノ別府地区・野田地区・八幡地区に大別され、西ノ別府地区では前方後円墳24基、円墳25基が現存している。最大規模の39号墳は柄杓式の前方向後円墳で全長112mを測り、小丸川流域の古墳としても最大規模である。詳細な築造時期は不明だが、墳形から4世紀後半頃に位置づけられる。高鍋町持田古墳群(22)は川南古墳群から約3.5km離れた台地上に位置し、現状では前方後円墳9基、帆立貝式古墳1基、円墳75基を確認することが出来る。群内最大の1号墳(計塚)は全長100mを測り、盤龍鏡と獣文緑獣帯鏡が各1面出土している。

このような大規模な古墳群が展開する一方、小丸川流域には永山古墳(23)、野首古墳群(24)といった小規模な古墳も築造されている。両古墳とも主体部には県内では類例の少ない横穴式石室を採用して

おり、古墳時代後期から終末期の小丸川流域を考える上で注目される古墳である。また下耳切第3遺跡では7世紀初頭～前期の牛牧1号墳とその周囲に8基の地下式横穴墓が確認されている。これらの古墳群に対し、集落遺跡の類例は上ノ別府遺跡(25)など少数であったが、近年は東九州自動車道の調査によって増加しつつある。本遺跡の南に隣接する尾花A遺跡(26)では古墳時代初頭～前期にかけての竪穴住居跡群が確認されている。その他にも小丸川右岸では野首第1遺跡から県道調査で中期後半～後期初頭の竪穴住居跡6軒、後期後半～終末期の竪穴住居跡3軒が検出され、隣接する野首第2遺跡からも古墳時代中期の竪穴住居跡群が確認されている。また先述の下耳切第3遺跡では後期から終末期の竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群が検出されている。しかし、古代になると遺跡数は激減することとなる。

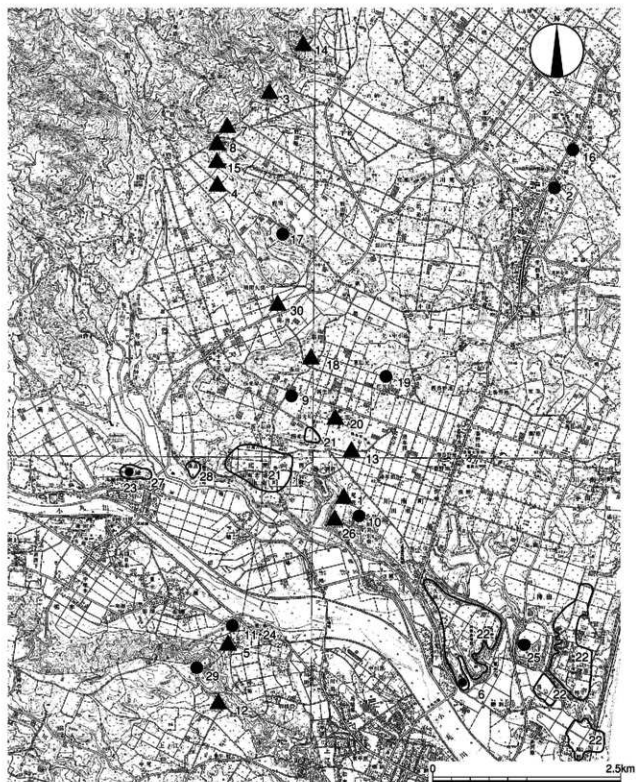
中世以降になると高城(27)、松山(28)、老瀬坂上第2遺跡(29)などの天正6(1578)年の高城・耳川の合戦に関連した遺跡・遺構が認められる。また時期は上がるが前ノ田村上第1遺跡(30)では14世紀前半の5間×2間の四面庇付建物や区画溝に囲まれた掘立柱建物跡群、湯牟田遺跡では12～14世紀代の掘立柱建物跡群、溝状遺構などが検出されている。



第2図 調査区と周辺地形 (1/4000)

【参考文献】

- 1 川南町 1983 『川南町史』
- 2 川南町教育委員会 1983 『川南町の文化財』遺跡詳細分布調査報告書
- 3 川南町教育委員会 1986 『上ノ原遺跡』川南町文化財調査報告書4
- 4 高鍋町教育委員会 1982 『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』
- 5 高鍋町教育委員会 1991 『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』高鍋町文化財調査報告書 第4集
- 6 高鍋町教育委員会 1995 『中尾・牛牧地区発掘調査報告書』高鍋町文化財調査報告書 第7集
- 7 高鍋町史編さん委員会 1987 『高鍋町史』
- 8 茂山潤・大野寅男 1977 『児湯郡下の旧石器』『宮崎考古』第3号 宮崎考古学会
- 9 宮崎県 1992 『宮崎県史』資料編考古1
- 10 宮崎県 1992 『宮崎県史』資料編考古2
- 11 宮崎県教育委員会 1979 『上ノ別府遺跡』お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
- 12 宮崎県教育委員会 1985 『中ノ迫A遺跡』宮崎県文化財調査報告書 第28集
- 13 宮崎県教育委員会 南九州城郭談話会 1998 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ』
- 14 宮崎県教育委員会 南九州城郭談話会 1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』
- 15 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『東九州自動車道(都農～西都賀)間埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』
- 16 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『東九州自動車道(都農～西都賀)間埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』
- 17 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『東九州自動車道(都農～西都賀)間埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』
- 18 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『東九州自動車道(都農～西都賀)間埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』
- 19 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『尾花坂上遺跡』一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業(鬼ヶ久保工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



- 1 西ノ別府遺跡 2 後牟田遺跡 3 虚空庵免遺跡 4 中ノ泊第1遺跡 5 野首2遺跡 6 持田中尾遺跡 7 赤石・天神本遺跡
 8 天神本第2遺跡 9 上ノ原遺跡 10 尾花坂上遺跡 11 野首第1遺跡 12 下耳切第3遺跡 13 湯牟田遺跡 14 市納上第1遺跡
 15 大内原遺跡 16 野嶋尾遺跡 17 中ノ泊A遺跡 18 赤坂遺跡 19 把栗田遺跡 20 国光原遺跡 21 川南古墳群 22 持田古墳群
 23 永山古墳 24 野首古墳群 25 上ノ別府遺跡 26 尾花A遺跡 27 高城 28 松山臺 29 老瀬坂上第2遺跡 30 前ノ田村上第1遺跡
- ※ ▲は東九州自動車道関連の遺跡

第3図 周辺遺跡分布図 (1/50000)

第三章 調査の方法と経過

第1節 確認調査の概要

西ノ別府遺跡は本調査に先立ち、平成16年6月1日から7月7日にかけて確認調査を行った。確認調査対象面積約13,000㎡に対し9箇所トレンチ(約1,300㎡)を設定し調査を行った(第4図)。土層はT8を除くすべてのトレンチでK-Ahの堆積が認められたが、調査区南側のT7・9では一部攪乱の痕が認められた。調査はK-Ah上面での遺構検出後、遺構が確認されなかった箇所を人力で掘り下げ、K-Ah下層の遺構・遺物の確認に努めた。調査の結果、K-Ah上面で近世の溝状遺構、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、第IVa層(MB0)下位で集石遺構1基、チャート剥片集中区、褐色土層下位で接合資料を確認した。またT6では攪乱上中から多量の焼石、塞ノ神式土器が出土した。調査区北側のT1・2、8はAT上面まで掘削を行ったが遺構・遺物は確認出来なかった。

以上確認調査の結果から、遺構・遺物が確認出来なかった調査区北側は本調査対象区からは除外した。本調査対象区はK-Ah上面では調査区中央部と南部

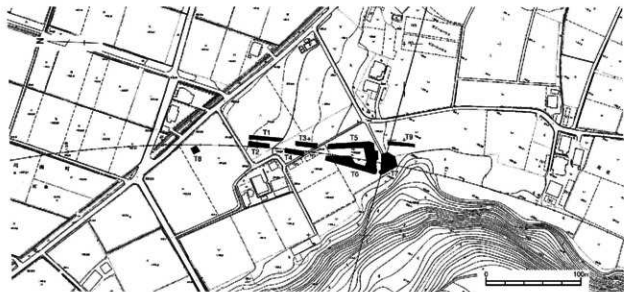
の計4,750㎡、K-Ah下層では調査区南部のみの2,400㎡とした。調査対象層は下層から順に褐色土層(旧石器時代)、暗褐色土層(縄文時代)、K-Ah(古墳時代・近世)の3層とし、平成16年12月13日から本調査を実施することになった。

第2節 発掘調査の方法

1 調査の方法

本調査にあたっては、まず重機を用い、表土・耕作土を除去した後、調査区に国土座標に準じて西から東にA~D、北から南に1~17の10m×10mのグリッドを設定し調査を行った。

調査はまず、K-Ah上面において遺構検出を行った。K-Ah上面調査終了後は南北グリッドの9ライン以南を調査対象範囲とし、縄文時代・旧石器時代の調査を行った。重機によるK-Ah除去後、縄文時代早期の包含層である暗褐色土層ではグリッドを4分割し千鳥式に掘削を行い遺構・遺物の確認に努めた。旧石器時代の包含層である褐色土層においては、確認調査で接合資料が出土したA11グリッドの周囲で、石器時代の遺構・遺物の確認を行った。



第4図 確認調査トレンチ配置図(1/4000)

2 調査日誌抄

【調査準備】

2004 0414 調査範囲と現状を確認するために初めて調査地へ行く。

2004 0426 1m×1mのトレンチを掘削し、土層の堆積状況を確認する。

【確認調査】

2004 0524 確認調査開始。重機による表土除去を行う。

2004 0525 重機による表土除去終了。

2004 0601 発掘作業員による作業を開始する。K-Ah上面での精査を行う。

2004 0614 T6南側から集石遺構1基を確認する。

2004 0622 T5とT6をつなぐ形でトレンチの拡張を行う。その過程で竪穴住居跡1軒を確認する。

2004 0628 T9北側の暗褐色土層から多量のチャート剥片が出土する。

2004 0714 トレンチの埋め戻しを行い、確認調査を終了する。

【本調査】

2004 1213 重機による表土除去を行う。

2004 1220 現場調査事務所等を設置。グリッド杭設置を行う。

2004 1227 年内最後の現場作業日。調査区の安全対策を行う。

2005 0105 発掘作業員による作業を開始する。調査区北側からK-Ah上面において精査を行い。近世溝を検出する。

2005 0119 K-Ah上面における検出状況の写真撮影を行う。

2005 0120 近世溝、竪穴住居跡の検出写真撮影を行う。

2005 0121 調査区北側から遺構掘削を開始する。

2005 0125 竪穴住居跡の掘削を開始する。

2005 0201 住居跡内から土器が集中して出土し始める。

2005 0202 住居西壁際から仿製重圏文鏡が出土。

2005 0214 土器集中部分の図面作成。

2005 0216 住居跡内の遺物取り上げ開始。

2005 0221 K-Ah面における空撮を行う。

2005 0222 溝状遺構の完掘写真撮影。

2005 0224 重機によるK-Ahの除去を行う。

2005 0301 縄文時代早期の調査開始。

2005 0302 調査区南側で散礫・集石遺構が確認される。

2005 0308 東九州自動車道指導委員による調査指導が行われる。

2005 0311 集石遺構の実測を行う。

2005 0322 集石遺構の実測と平行して後期旧石器時代包含層の掘削を開始する。

2005 0324 調査終了部分から埋め戻しを開始する。

2005 0325 集石遺構完掘の写真撮影を行う。

2005 0330 埋め戻しを終え、調査を終了する。

第3節 整理作業及び報告書作成

本遺跡発掘調査資料は平成17年4月から本センターにおいて整理作業を開始した。

まず4月から6月までの間で遺物の洗浄、注記、接合、計測を行った。出土した土器の大半は竪穴住居跡内のものであり、その接合に大半の時間を費やした。またその間には検出した集石遺構の石材の分類、計測を行った。7月からは出土遺物の実測を行い、9月からはトレースを開始した。またそれと平行して図面レイアウト、文章の作成を行い、11月には遺物の写真撮影を行った。

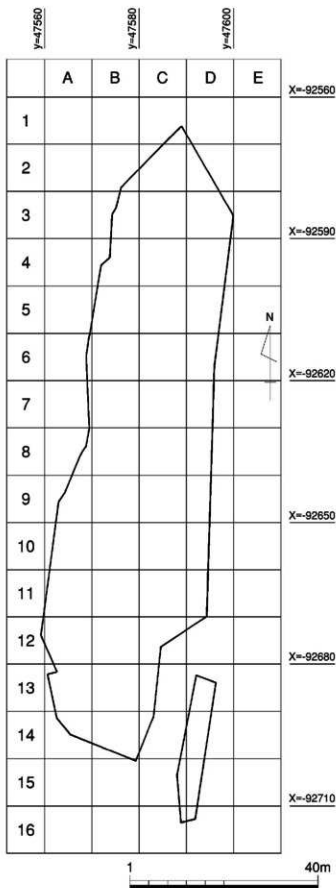
第IV章 調査の概要と基本層序

第1節 調査の概要

調査は平成16年12月13日から平成17年3月30日にかけて行われた。調査面積はK-Ah上面で4,750㎡、K-Ah下層では2,400㎡である。前章で触れたとおり、K-Ah下層の暗褐色土層では調査区南側のみを調査対象範囲とし、千鳥式に掘削を行い、遺構・遺物の確認を行った。その下層の褐色土層では確認調査で接合資料が出土したA11グリッド周辺の調査を行った。本調査で確認された遺構・遺物は下層から褐色土下位では旧石器時代の接合資料1点、褐色土上位～中位ではナイフ形石器4点と剥片6点が出土した。暗褐色土下位からは縄文時代早期の集石遺構13基と散礫4群、チャート剥片集中区を検出し、遺物は押型文土器、条痕文土器、無文土器、石鏃が出土している。K-Ah上面からは、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、土坑2基を検出した。竪穴住居跡からは多量の土器と、九州では類例の少ない仿製重文鏡が1面出土した。近世以降では溝状遺構7条、土坑1基が検出された。

第2節 基本層序

本遺跡の地形はほぼ平坦であり、調査区内における層序に大きな違いは認められなかった。表土下ではK-Ahの良好な堆積が認められたが、調査区南側では攪乱の影響により、一部堆積が認められない箇所があった。また第IVb層は谷に近い調査区西側や南側では堆積状況が悪く、第IIIb層下層の調査時では第IVa層との区別が困難であった。本遺跡における基本層序は以下に記すとおりであるが、東九州自動車道（都農～西都間）の調査においては基本的に認められるテフラやローム層、黒色土層については、共通の略称を用いており、文中のMB0やML1などはこれにあたる。なお、第6図基本土層図は南北グリッドの9から11かけての調査区東壁を作画した。

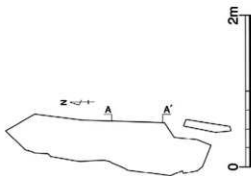
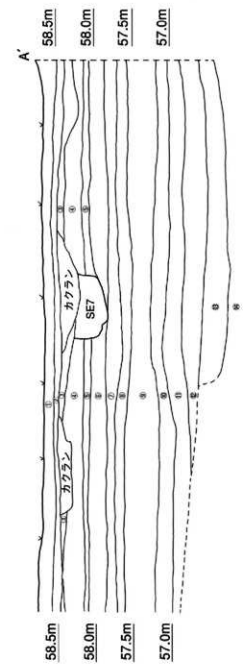
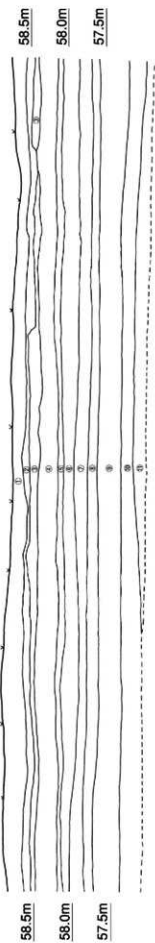
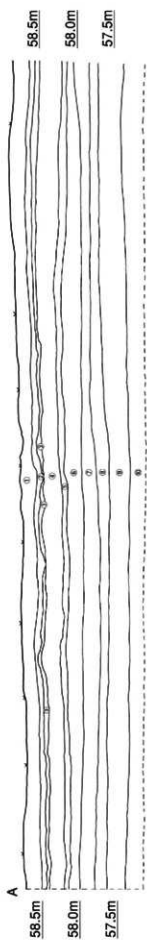


第5図 グリッド配置図 (1/800)

- ① 第Ⅰa層 表土(耕作土)Hue7.5YR 黒褐色3/2
しまり、粘質はなく粒子は粗い。小石を含む。
- ② 第Ⅰb層 表土 Hue10YR 黒褐色土3/2
非常に硬くしまり、粒子は細かい。小石、K-Ah粒子を含む。
- ③ 第Ⅰc層 表土 Hue10YR 黒褐色3/2
第Ⅰb層に比べしまりがなく、やや粘質がある。
- ④ 第Ⅱ層 黒色土 Hue10YR 黒2/1
クロボクに相当する。粒子は細かく、粘質がある。
- ⑤ 第Ⅲa層 鬼界アカホヤ火山灰二次堆積
Hue10YR 黒褐色2/3
しまりはなく、火山ガラス質を含む。
- ⑥ 第Ⅲb層 鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)
Hue10YR 黄橙8/8
黄橙色の火山ガラス質を含む。箇所によっては硬くしまる。
- ⑦ 第Ⅳa層 黒褐色土 (MB0) Hue10YR 黒褐3/1
粒子は細かく、しまりがある。縄文時代早期の包含層。
- ⑧ 第Ⅳb層 暗褐色土 Hue10YR 暗褐3/3
質感はⅣ層と似ているが、ややしまりがない。調査区内の一部では堆積してない箇所がある。ML1に相当する層か
- ⑨ 第Ⅴ層 褐色土 Hue7.5YR 褐色4/4
粒子は粗く、しまりはない。下位では10YR 黒褐色3/2のブロックが混ざる。後期旧石器の包含層。
- ⑩ 第Ⅵ層 暗褐色土 (MB1) Hue7.5YR 暗褐色3/3
粒子は粗く、しまりはない。粘性がある。
- ⑪ 第Ⅶ層 始良Tn (AT) Hue7.5YR 明褐色5/6
堆積はあまり良好ではなく分層することは出来ない。一部では第Ⅶ層と混在しており、ブロック状になっている。
- ⑫ 第Ⅷ層 明黄褐色土 Hue10YR 明黄褐色6/6
粒子は細かく、しまり、粘性がある。小石、赤褐色の粒子を含む。
- ⑬ 第Ⅸ層 橙土 Hue7.5YR 橙6/6
質感はⅨ層と似ている。小石、赤褐色粒子の割合が増える。
- ⑭ 第Ⅹ層 明褐色土 Hue7.5YR 明褐色5/8
粒子は細かく、しまり、粘性がある。拳大の礫を多数含む。

【参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『東九州自動車道(都農～西都農)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書』Ⅳ



第6図 基本土層図 (1/50)

第V章 調査の成果

第1節 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代では遺構は確認できなかったが、A11、A12、B12、A13グリッドで旧石器時代の石器が出土している。出土した石器はナイフ形石器4点、剥片6点、接合資料1点であった。出土層位は第V層上位から下位にかけてであるが、第V層上位から出土した石器のなかには後述する縄文時代早期の遺物とほぼ同一レベルで出土したのものもある。しかし今回の調査で出土した旧石器時代の石器と縄文時代早期の石器では使用石材に明確な差があったため、旧石器時代の石器と判断した。

ナイフ形石器（第7図 1～4）

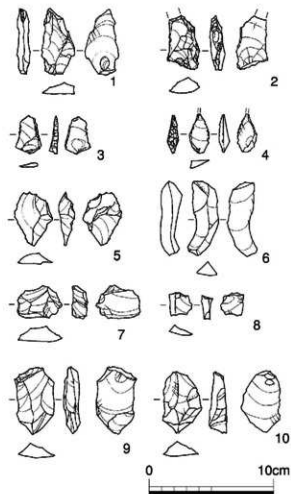
すべて第V層上位から出土しており、石材はいずれも流紋岩である。出土位置はA11、A12、B12、A13グリッドで1点ずつ出土している。1～3は一側縁加工ナイフ形石器であり、1は左側縁の先端部に調整が施されている。2～3は小型のものである。4は二側縁加工ナイフ形石器だが先端部は折損している。

剥片（第7図 5～10）

剥片は、第V層上位から5～8、中位から9・10が出土した。5～8はA12グリッドから出土し、いずれも石材は流紋岩である。6は表面の摩滅が激しく、リング等は不明瞭であった。9・10も石材は流紋岩であり、いずれもA11グリッドから出土した。

接合資料（第8図 11～15）

A11グリッドの第V層下位から接合資料1点が出土した。石核（11）と剥片4点（12～15）の計5点からなり、接合時においては、長さ12cm、幅5.6cm、重量1.2kgである。石材はホルンフェルスからなり、石核の周囲に剥片が隣接して出土した。また剥片にも隣接していくつかの石が出土したが、いずれも砂岩の自然石であった。剥離順としてはまず左下側面

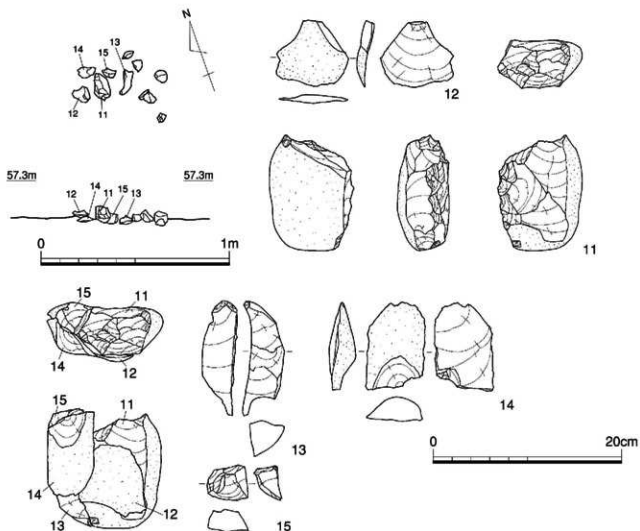


第7図 第V層出土石器実測図（1/3）

を打面にし14を剥出してはいる。その後、打面作成のために、13を下からの打点により剥出する。そして、左側面に打面を変え、11を剥出している。さらにすぐ上を打点にして、もう一枚の剥片を剥出している。その後は正面を打面にし、剥離作業をしているのが認められる。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では第III b層下層の調査は確認調査の結果から南北グリッドの9ライン以南を調査対象としている。確認調査では竪ノ神式土器や無文土器が出土しており、縄文時代早期の遺構の存在が想定さ



第8図 接合資料出土状況図 (1/20)、接合資料実測図 (1/4)

れていたが、本調査では散礫4群、集石遺構13基、剥片集中区が1箇所検出された。いずれも出土層位は第IVa層下位から第V層上面にかけてである。これらの遺構が検出された調査区南西部では第IVb層の堆積が明瞭ではなく、第IVa層の下に第V層が堆積している状況であった。

調査終了後、散礫、集石遺構の石は洗浄をし、以下の分類ごとに重量を計測した。記述中の割合は全体の重量に対する割合であって、個数の割合ではない。

集石遺構構成礫分類基準

赤化礫	表面が一部でも赤化している礫
円礫	石の側面の破損が2カ所以下の礫
大型礫	長軸15cm以上の礫

1 散礫 (第9図)

散礫は4群確認された。検出された散礫はいずれも分布域は狭く、礫の密度も低いものが目立つ。以下にその詳細を記す。

散礫 1

検出された散礫の中では最も北側に位置する。そ

の範囲は4m×4mと検出された散礫の中では最も狭く、礫も密度の低い。構成される礫は割れた砂岩が中心で8割の礫が赤化している。またその下からはSI5が検出された。

散礫2

調査区西側から検出された。礫の密度は低いが、その範囲は12m×8mと今回検出された散礫のなかでは最大である。構成される礫は大型礫が6割を越え、他の散礫に比べ著しく高い。また赤化した礫は7割と他の散礫に比べ低い。SI1が含まれる。

散礫3

調査区南端に位置し、散礫4と隣接している。構成される礫の密度は高く、その大多数は破損した礫であった。7割強の礫が赤化している。また礫の中から未製品の磨製石斧(28)が出土している。下からはSI10、11が検出されているが、散礫3と後述する散礫4が検出された調査区南側は攪乱を受けており、これら散礫を構成する礫は本来、下から検出された集石遺構の上部の礫であった可能性が高い⁹⁾。

散礫4

散礫3の東側から検出された。散礫3が破損した礫が大多数を占めるのに対し、円礫が6割を超える。また赤化した礫も8割強と散礫中もっとも赤化率が高い。下からSI8、9が検出された。

2 集石遺構(SI)

今回13基の集石遺構が検出された。これらの集石遺構はその構造の特徴から以下の3種類に分類できる。

A類 掘込み・配石を有しない(SI1～5、13)

B類 掘込みを有するが配石は有しない(SI6～10)

C類 掘込み・配石を有する(SI11・12)

基数をみるとA類6基とB類5基はほぼ同数であり、配石をもつC類は2基と少ない。分布域はA類の多くは調査区西側に分布し、規模の小さいものが目立つ。B類は調査区西側と南側にその分布が認め

られるが、例外としてSI6のみは調査区の北側中央に分布し、他の集石遺構とは距離が離れている。掘込みは最大で15cm程度といずれも浅い。C類は調査区南側に分布している。いずれも散礫の下から検出されている。B類と同様に掘込みは浅いが先述のように上部が破壊されている可能性がある。構成する礫はいずれも砂岩が中心で、その次がホルンフェルスが多く認められ、尾鈴山酸性岩類は少数であった。

A類(第10図)

SI1

30cm大の扁平な礫を中心に10cm大の礫が集中しており、散礫2の中に含まれる。構成される礫は少ないが、いずれも赤化している。

SI2

散礫2とSI7の間で検出された。構成される礫は最も少ない。礫は20cm大のものを中心に比較的大型のもので構成される。赤化率は9割と高い。

SI3

5cm大の礫を中心に構成され、礫の密度はあまり高くないが、その広がり大型の部類に入る。SI4が隣接している。

SI4

SI3の南から検出された。構成される礫はSI2と類似している。

SI5

竪穴住居跡内から検出された。構成される礫は少なく円礫が中心である。またほぼすべての礫が赤化している。

SI13

SI12隣接して検出された。構成される礫は円礫が中心で10cm大のものが多い。赤化率は9割弱と高い。

B類 (第10・11図)

SI6

他の集石遺構からは離れており、最も北側で検出された。散礫1の下から検出され、角礫を中心に構成される。掘込みは15cm程度で下部は礫を含まない黒褐色の埋土である。

SI7

SI3に隣接して検出された。小型の礫を中心に構成され、赤化率は8割程度と他の集石遺構と比較すると低い部類に入る。掘込みは東西に長い楕円形で深さは15cmである。掘込みの下部からは多くの炭化物が検出された。

SI8

調査区南西部、散礫3の西側に隣接して検出された。10cm大の角礫から構成され、8割の礫が赤化していた。礫密度は低い。掘込みは楕円形を呈し、深さは10cm程度と浅い。埋土は褐色で少量の炭化物を含んでいる。

SI9

散礫3の下から検出された。礫は小型の角礫が中心で、その密度も低い。また赤化率が5割程度と他の集石遺構に比べ著しく低い。掘込みは長軸で90cmと最も小型で深さも浅い。

SI10

調査区の南端に位置し、散礫4の南で検出された。礫の密度は低く、円礫を中心に構成されている。埋土は締まりのない暗褐色だが下部では礫を含まない褐色土が堆積している。少量の炭化物を含んでいる。

C類 (第11図)

SI11

散礫3の下、SI10の西側で検出された。散礫を除去した段階ですでに配石が露呈しており、散礫除去の際に一部上部礫も除去してしまった可能性がある。配石は20cm大の礫を中心に置き、その周囲に大型の礫を配している。礫の大きさは30cm以上のものもあ

り、他の集石遺構の礫に比べ著しく大きい。また掘込み面より配石は浮いており、また小型礫を配石の下に置き高さを揃えているのが確認できた。掘込みは最も大きく長軸で約140cmとなる。埋土はしまりのない暗褐色土で多くの炭化物を含んでいた。

SI12

散礫4の下から検出され、SI13と隣接している。構成される礫は円礫が中心で、SI13と比較すると大型の礫が目立つ。礫の密度は高く、8割の礫が赤化していた。掘込みは20cm程度であるが他の集石遺構に比べ明瞭な掘込みを持つ。配石は調査の不備により南側半分を図化することが出来なかった。配石は扁平な礫を用いており、激しく熱を受けているものが認められた。また上部の礫が砂岩中心だったのに対し、配石はホルンフェルスを用いている。

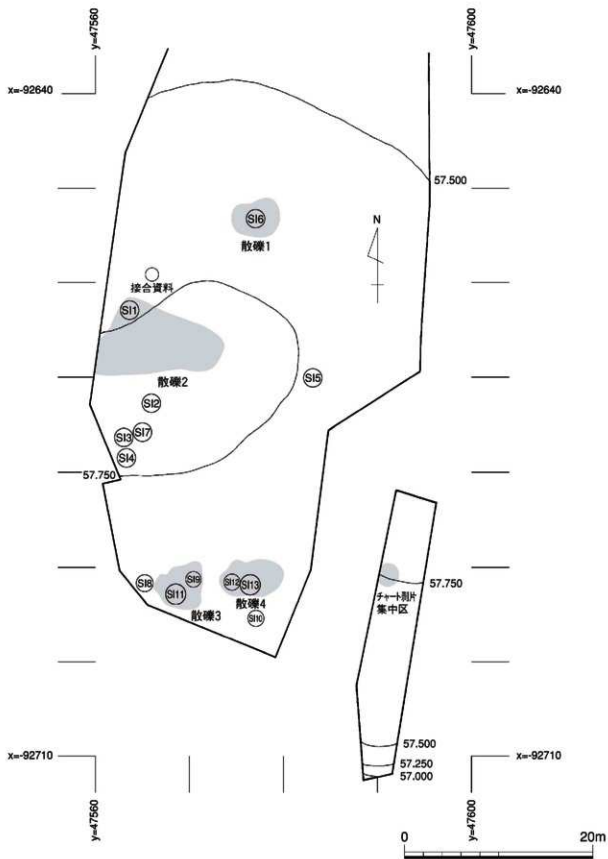
3 剥片集中区 (第9図)

調査区南東、D14グリッドの調査区西壁際からチャート剥片集中区を確認した。チャート剥片は第IV層下位からその下層である第V層上面にかけて出土し、3m×3mの範囲で多量に出土した。このD14区から出土したチャートの量は、調査区全体から出土したチャート剥片の約8割を占める。出土した剥片はすべてチャートであり、1cm以下のものが大半を占める。剥片の他にチャート製石鏃(29・30)、黒曜石石核(31)が出土している。また細片のため図化できなかったがチャート剥片とともに少数の無文土器も出土している。出土したチャート剥片とチャート製石鏃は同一の石材であることから、石鏃などの石器製作場であった可能性が高い。

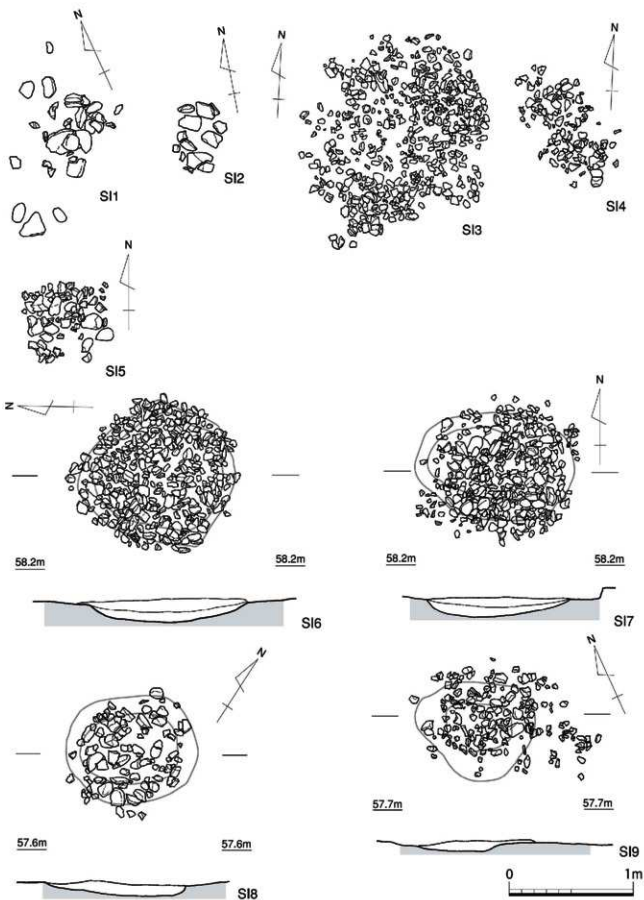
4 出土遺物

(1) 土器

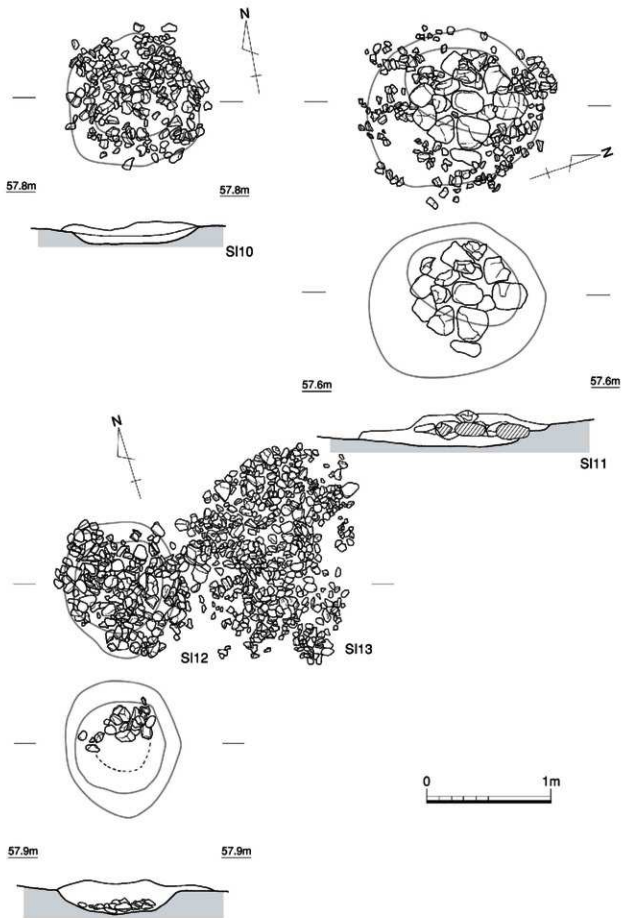
今回の調査では約80点の縄文土器が出土したが、その全ては包含層中から出土したものであり、先述のチャート剥片集中区を除いて遺構内から出土したものは無かった。出土した土器は大半を無文土器が占め、押型文土器や条痕文土器は1割程度であった。また胴部の細片が多く、全形が分かるものは皆無で



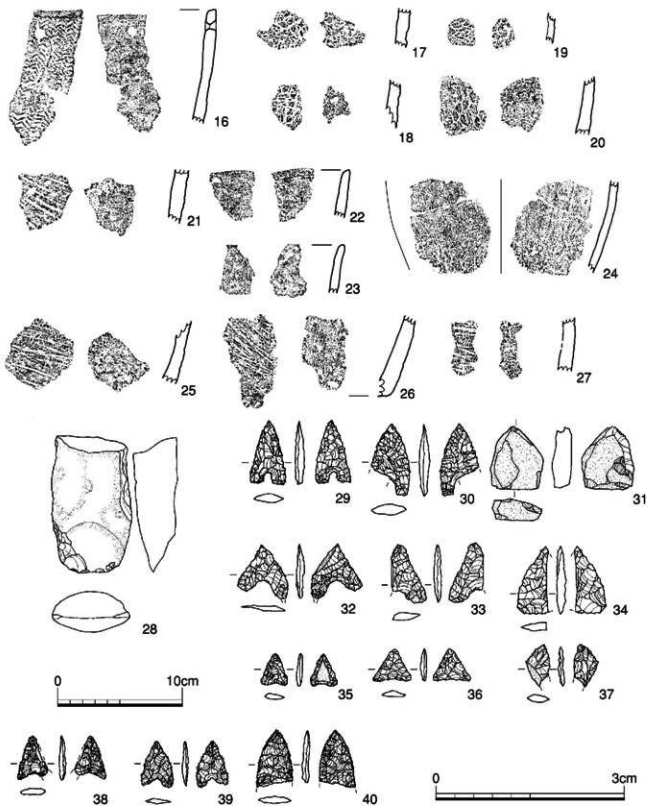
第9図 旧石器時代・縄文時代遺構分布図 (1/400)



第10図 集石遺構 1 (1/30)



第11図 集石遺構 2 (1/30)



第12図 縄文時代出土遺物実測図 (16~28、1/3)
 (29~40、3/5)

あったため、図化して掲載したものは12点のみである。以下に出土層位ごとに遺物の特徴を説明する。

第Ⅳ層下位出土土器（第12図 16～24）

16～20は押型土器で、16は外面に横方向の山形文を施し、内面はナデ調整で無文である。胎土にはチャートを含んでおり、口縁部近くに補修孔と思われる穿孔を持つ。器壁は薄く、器形はバケツ状になると思われる。17～19は菱形に近い楕円押型文を施し、内面は無文である。胎土の特徴から同一個体の可能性がある。20も同じ楕円押型文であるが、その文様は17～19に比べ角がとれ、縦方向に長い楕円となっている。21は条痕文土器である。斜位に浅いU字の条痕が施され、器壁は厚い。22～24は無文土器

である。22～23は口縁部で23はやや外反する。

第Ⅴ層上面出土土器（第12図 25～27）

第Ⅴ層上面からは条痕文土器と無文土器が出土している。ここでは3点の条痕文土器を図化した。いずれも斜位に浅いU字の条痕が施されている。調整、胎土ともに21に似たものとなっている。

(2) 石器

出土した石器は石鏃がほとんどであり、わずかに石斧が認められた。使用された石材はチャート・黒曜石が大半を占める。遺構・層位ごとに出土石器の特徴を述べる。

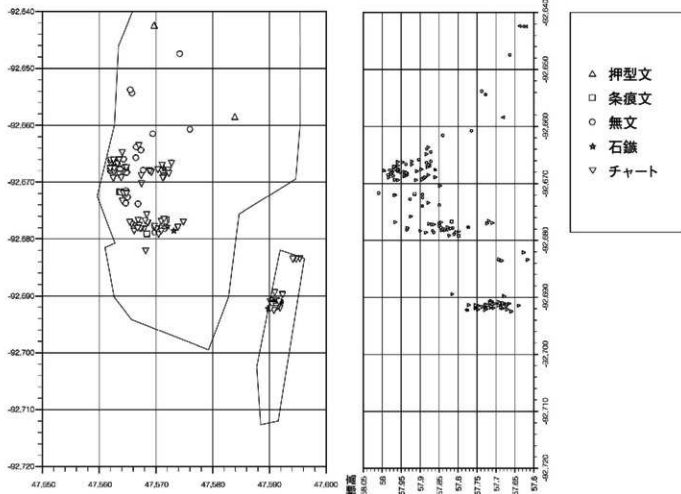


図13 縄文時代出土遺物分布図

散礫3出土石器 (第12図 28)

26は散礫3から出土した磨製石斧の末製品である。刃部は給刃で、わずかな研磨痕が認められる。基部は敲打痕があり、上部付近は折れて破損している。おそらく、基部の剥離・敲打の過程で折れてしまい、そのまま廃棄されたものと考えられる。表面は風化が著しく、リング等は不明瞭である。

チャート剥片集中区出土石器 (第12図 29~31)

29・30はチャート製の無茎凹基鏃である。いずれも挟りは比較的浅い。30は側辺を湾曲させている。31は黒曜石の石核である。側辺に剥離痕が認められる。桑ノ木津留産と思われる。

第IV層下位出土石器 (第12図 32~37)

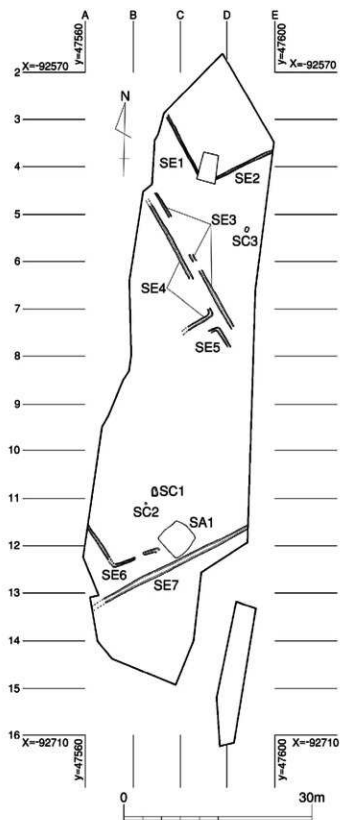
32は正三角形の無茎凹基鏃で、挟りの深い鏃形のタイプである。33は挟りは浅く、脚部が欠損している。34は欠損部分は大きく、全形は不明であるが、おそらく挟り、脚部をもたないタイプである。35~36は正三角形を呈する小型の石鏃である。35は姫島産黒曜石製で腹面は、基部と側面のみに調整を加えている。36はホルンフェルス製である。37は下部が欠損しており、不整形で特異な形状を呈する。

第V層上面出土石器 (第12図 38~40)

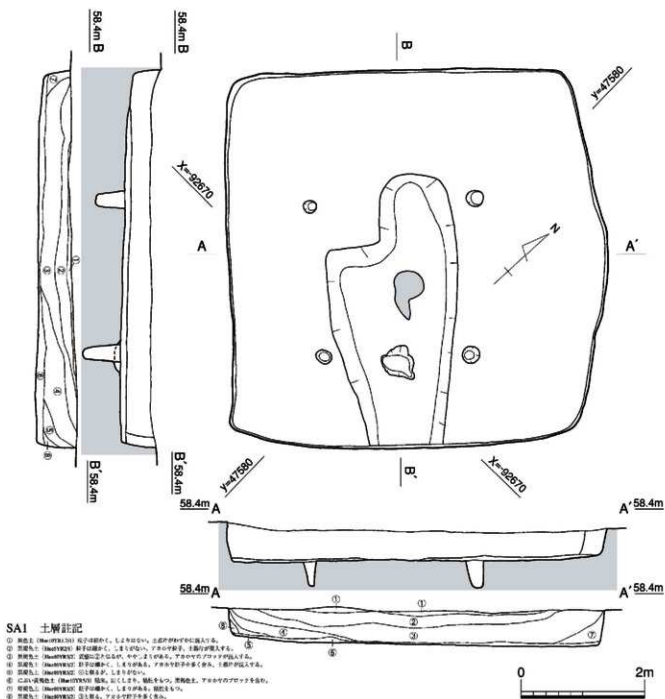
38~39は二等辺三角形の形状でやや小型である。38は黒曜石製である。39は脚部がやや内湾する。いずれも挟りは浅い。40は桑ノ木津留産黒曜石製である。側面に丁寧な鋸歯状の調整が加えられている。基部が欠損しており、挟り・脚部の有無は不明である。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒、土坑1基、当該期の可能性のある土坑1基を第Ⅲb層上面で確認した(第14図)。



第14図 古墳時代・近世以降遺構分布図 (1/600)



第15図 SA1 (1/60)

1 竪穴住居跡 (SA)

SA1 (第15図)

調査区中央南側で検出された(第14図)。平面プランは北壁中央がやや膨らむ6m×6mの隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、柱穴は対角線上に4本確認することが出来た。主柱穴間の芯々距離は南北で約2.3m、東西で約2.5mを測る。柱掘方

は20cm～30cmの円形プランで深さは最深のもので床面から約80cmを測る。埋土はレンズ状の堆積をしており、黒褐色の埋土にアカホヤ粒子が含まれていた。床面には貼床が施されていたが、壁際では地山が露呈している箇所もある。床面は西壁から中央部分にかけて楕円状にわずかに窪んでおり、その中央部には焼土が認められた。焼土は東西に長い不整形な楕

円形を呈し、掘込みは認められなかった。また焼土の東側には住居内土坑1基が確認できた(第16図)。土坑は約1m×1mの不整形な円形を呈し、南側の底面からまともって甕の欠片が出土している。出土した甕(41)は口縁部ではハケ後に横方向のナデを施している。胴部はナデ調整となっている。口縁部は中程でわずかに屈折しながら外側に伸びる。頸部の稜は内面、外面ともに明瞭に認められた。

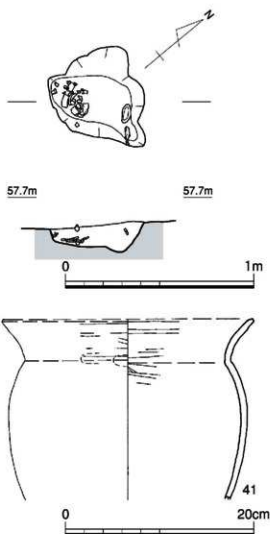
出土遺物は1軒の住居跡としては多量の土器、石製品が出土した。出土状況は住居跡北西隅から中央部にかけて出土するものと床面付近から出土するもの、埋土上~中位から出土するものがある。次に出土場所ごとの遺物の特徴を土器・石製品に分けて述べる。

住居北西隅~中央部出土土器(第17~19図 42~69)

住居北西隅から中央部にかけて3m×1mの範囲で帯状に土器が集中して出土した。出土した土器は大半を甕が占め、残りは壺や鉢であった。この箇所から出土した土器は高い接合率をみせ、完形近くまで復元できる固体も多く認められた。また遺物の出土レベルは住居中央部に近いほど床面に近い値になることから、住居廃絶後の埋没過程のなかで一括して廃棄された可能性が高い。

甕は出土量の約8割を占めるが、外面の調整により大別することができる。42~53は外面をハケ、もしくは工具ナデによる調整を行うタイプである。いずれも内外面ともに上半部を中心にナメ方向のハケ・工具ナデがなされ、下半部にはナデ・工具ナデとなっている。頸部の稜は明瞭に認められるものと、わずかに認められるものがある。また同様に、口縁部も直線的に立ち上がるものと口唇部付近で外反するものがある。底部はレンズ状を呈するものがほとんどだが、45のみがわずかな上げ底となっている。52・53は底部であるが、タタキが認められないためこのタイプに含めている。その中でも53は底部外面に粘土紐を巻きつけ上げ底状の底部を作り出すものであり、このような底部はこの1点であった。

54~63は外面にタタキが施されるタイプである。タタキは底部が欠損している59~61以外はすべて底



第16図 住居内土坑(1/20)、土坑出土遺物実測図(1/4)

部にまでタタキが施されていた。頸部の稜はいずれも明瞭に認められ、口縁部の外反の度合いはタタキを施さないものに比べ強い。底部はわずかな平底やレンズ状を呈するものがほとんどである。

64は広口壺である。口唇部付近を内側に折り曲げ直立させ、内外面ともハケによる調整を行っている。65は胴部のみであるが、形状から壺の胴部と考えられる。66~67は小型丸底の壺形と鉢形である。66の壺形の口縁部は口唇部付近で内湾している。底部は丸底であるが、中軸線に対し2cmほど左に寄っている。調整は口縁部はハケ、胴部はミガキが主体である。器壁は全体的に薄手で丁寧な作りとなっている。67の鉢形の口縁部は外反し器壁は厚い。底部はやや

レンズ状となる丸底で、内外面ともミガキによる調整が施されている。68～69は胴部から底部のみである。68は外面にミガキを施すもので球形に近い胴部をもつと思われるが、器壁は厚い。69は浅鉢の底部と思われる。

住居床面出土土器（第20・21図 70～96）

床面付近から出土した土器は住居中央東側から集中する状況が認められる。また西壁付近からも数個体が出土しているが、小型の壺・鉢が集中しており、やや他の出土状況とは異なる様相を見せている。またその付近からは銅鏡が出土している。床面から出土した土器は壺類が多く、その次が甕であり、鉢類も一定数認められる。先述の住居北西隅～中央部から出土した土器とは組成に異なりを見せている。また小型の器種が多いのも特徴である。

70～77は甕である。調整はハケまたは工具ナデが主体でタタキを施す個体は75のみである。完形近くまで接合できる個体は認められなかった。出土した甕の口縁部は直線的に外側にのびるものと、口唇部付近で外反するものがある。また頸部には明瞭な稜が認められる。底部はレンズ状のもの（75）と平底のもの（76）、上げ底のもの（77）があり、上げ底の底部はこの1点のみであった。

78は広口壺、79は短頸壺であり、いずれもわずかに外反する口縁部である。80・81は短頸壺の口縁部と胴部で同一個体である。口縁部はわずかに内湾し、調整はナデ主体である。82～83は小型の直口壺でほぼ完形で出土している。いずれもわずかに内湾する口縁部をもち、底部は平底となる。調整は胴部外面にミガキを施すが、口縁部付近はナデ調整となる。内面はナデ調整で82は粘土積み上げ痕が明瞭に認められる。84は壺胴部であり、外面にタタキを施す。口縁部が欠損しているため形式は不明である。85～87は小型壺の口縁部である。85・86は外面にミガキ調整が施されて、前者はやや乱雑な調整となっている。88は複合口縁壺である。ほぼ直立する複合口縁部をもち、外面には櫛描波状文が施される。また頸部には刻目突帯をもつ。89はミニチュアの壺である。口縁部は82・83と似た作りとなっている。内外面と

も調整はナデ主体で内面には明瞭に粘土積み上げ痕が認められる。内外面とも黒色をしている。90は外面にミガキを施す壺の胴部であるが形式は不明である。

91～96は鉢類である。91・92はミニチュアの鉢で西壁際から近接して出土した。器高は5cmほどで92は完形である。93～96は浅鉢である。いずれも口唇部は短く折り曲げるように形成している。また外面の調整はミガキが主体である。

埋土上～中位出土土器（第21図 97～111）

住居埋土出土のもので口縁部、底部が壊っているものを図化している。出土状況としては住居北側から多く出土する傾向がある。

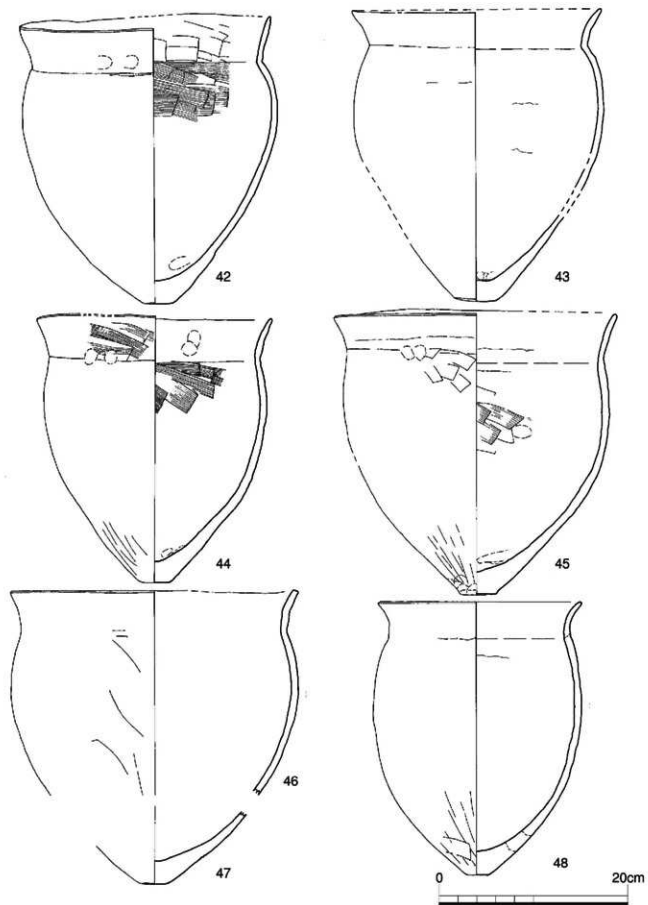
99は小型の壺であるが、粗雑な作りとなっている。口縁部は短く、ほぼ垂直に立ち上がる。101は複合口縁壺で88と同形式のものだが複合口縁部が内傾し、外面の櫛描波状文も不明瞭である。102～104は甕の底部で、前者以外は外面にタタキを施す。107～108はミニチュアの鉢で107と91は器壁の厚さに違いがあるが、形状は似通っている。109～111は高坏である。住居から出土した高坏はこの細片3点のみであった。

出土石製品（第22図 112～130）

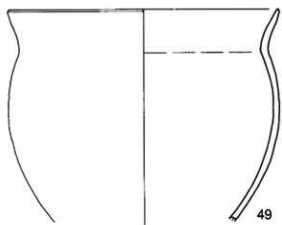
石製品は計19点出土しているが、そのほとんどは床面付近から出土したものである。また土器の出土が希薄であった住居南側に石製品の出土が多く認められた。種類としては磨石、敲石、砥石、台石、石包丁などが出土しており、磨石と台石で全体の約半数を占めている。

磨石（112～116）は5点出土しているが、石材は114の砂岩以外はすべて尾鈴山酸性岩類である。116は磨面が明瞭に確認できなかったが石材、形状などから磨石と判断した。

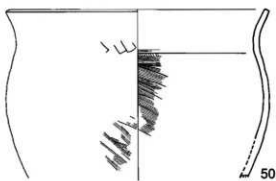
117・118は敲石である。118は砂岩製で側面に敲打痕が認められる。119～122は砥石である。120はホルンフェルス製で、他は砂岩製である。123は軽石で、住居中央部から出土した。使用痕などは認められず、その用途は不明である。



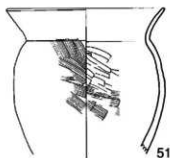
第17图 SA1出土土器実測图1(1/4)



49



50



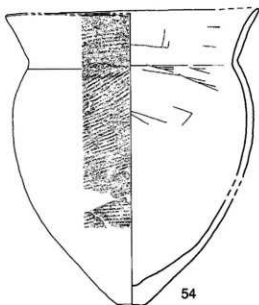
51



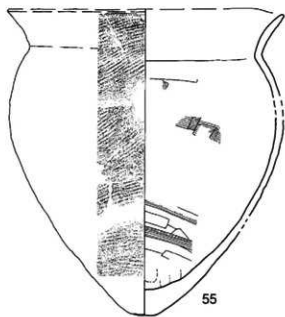
52



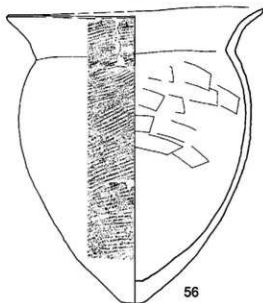
53



54



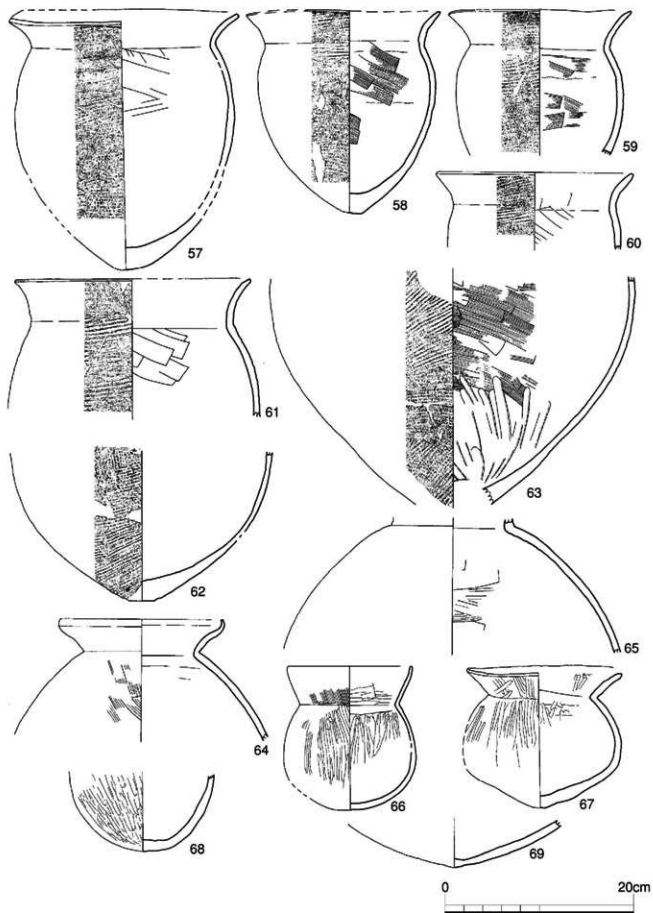
55



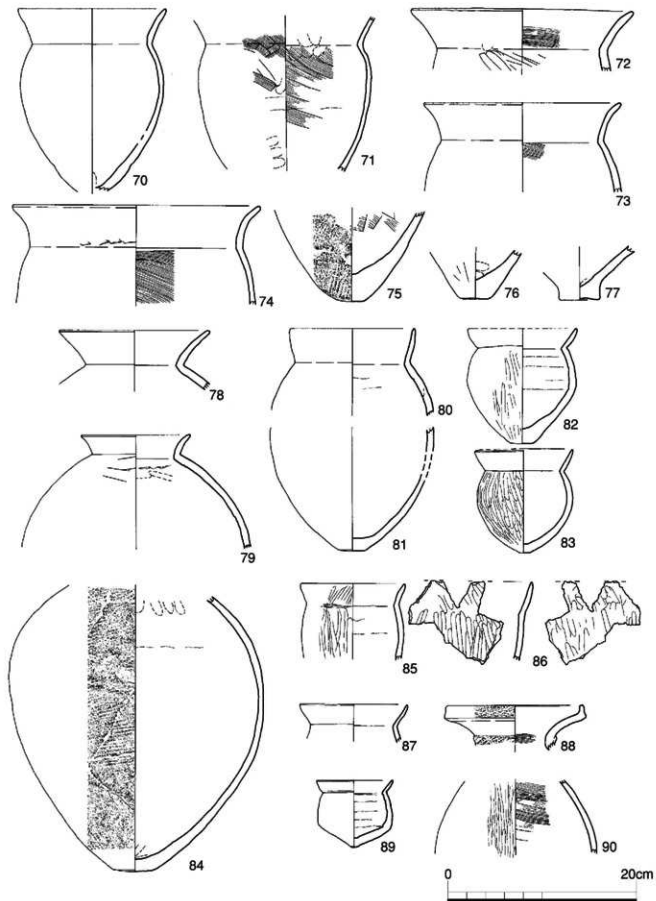
56



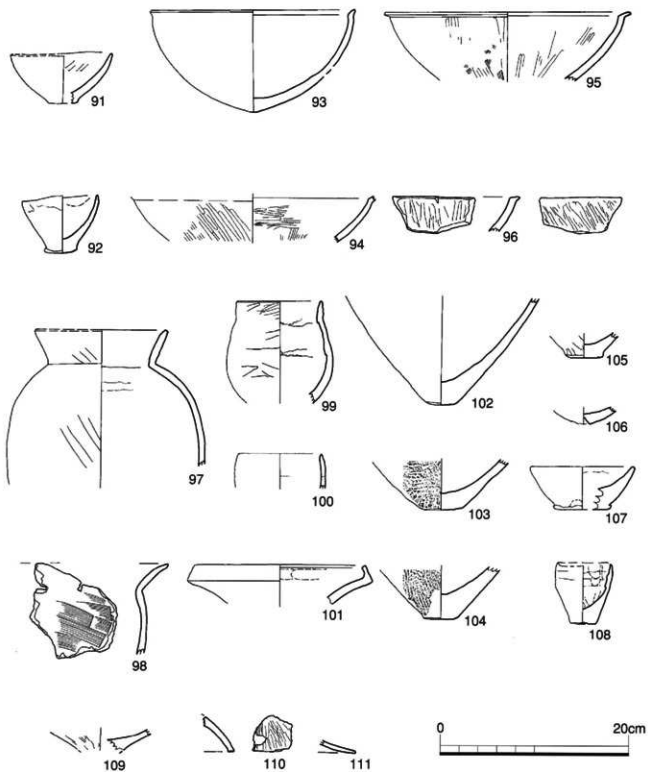
第18图 SA1出土土器实测图2 (1/4)



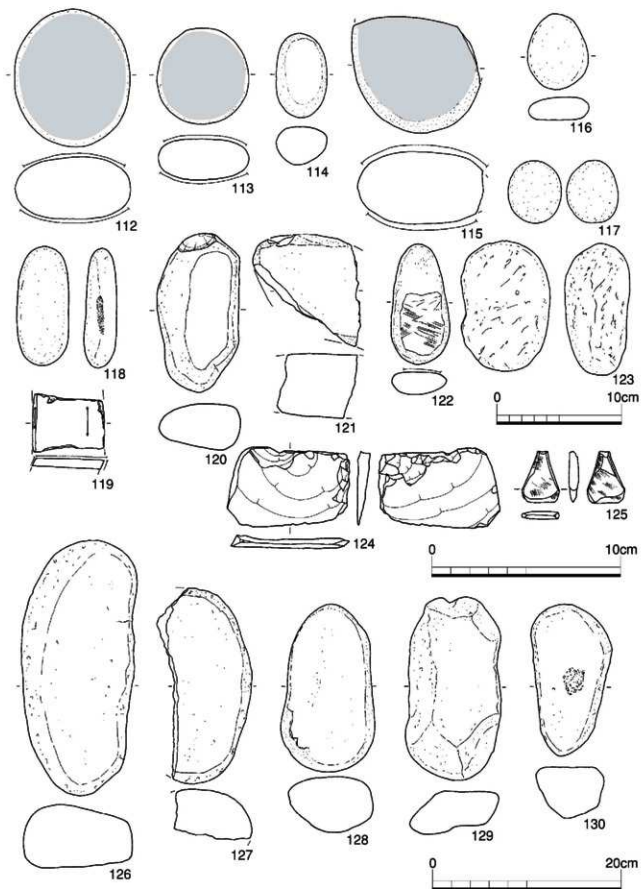
第19图 SA1出土土器実測图3 (1/4)



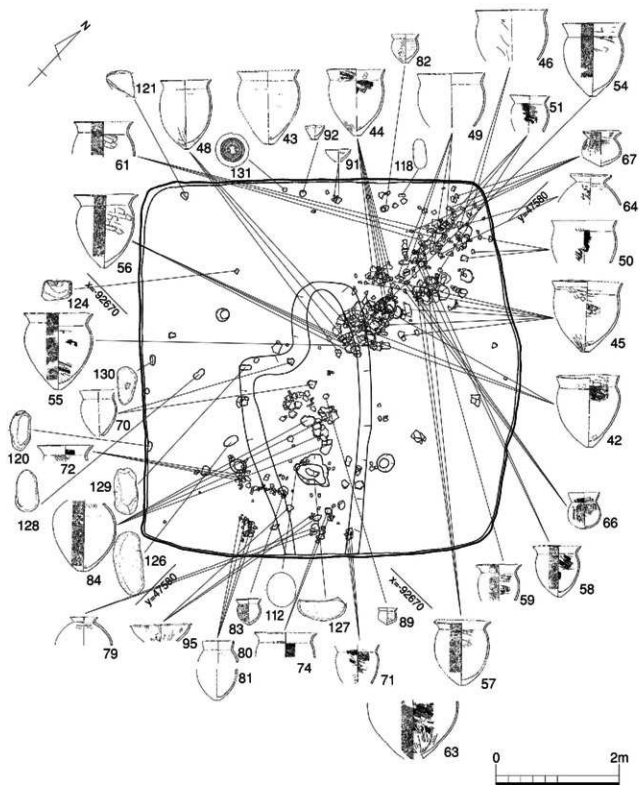
第20图 SA1出土土器实测图4 (1/4)



第21图 SA1出土土器実測图5 (1/4)



第22図 SA1出土石器実測図 (112~113、1/3)
 (124・125、1/2)
 (127~130、1/4)



第23図 SA1遺物出土状況図 (1/60)

124はホルンフェルス製の打製石包丁である。125は不明磨製石製品である。八の字の形状で先端は刃部のようにになっているが、使用痕は認められなかった。上部は欠損している。

126～130は台石である。石材は砂岩製とホルンフェルス製があり、最大の123は長軸27cm、重量は3kgである。

銅鏡 (第24図 131)

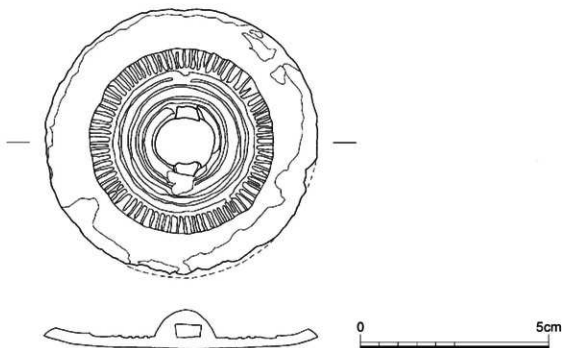
銅鏡は床面から5cmほど浮いて住居西壁際から鏡背を上にして出土した。縁辺に若干の欠損が認められるが、ほぼ完形であり、状態も比較的良好であった。鍍上がりは良好で、文様も明瞭である。色調は明緑灰色(Hue5G6/1)で大きさは面径7.1cm、厚さ0.5cm、重量は40gである。文様は幅広い平縁の内側に、直交櫛歯文帯、四圍をめぐらし鈕に至る。櫛歯文間の幅はばらつきが認められ、また鬮文もやや不整形である。鈕は半球状で、鈕孔は長方形を呈している。以上、文様帯の特徴から出土した銅鏡は重圏

文鏡であり、面径や鍍上がりから、仿製重圏文鏡と考えられる。また直交櫛歯文帯付近には赤色顔料の付着が認められる。

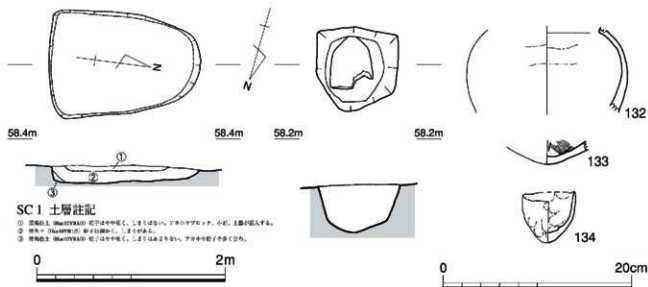
2 土坑 (SC)

SC 1 (第25図)

SA1から北西に5m程離れた位置から検出された。1.6m×1.2の馬蹄形をした土坑であり、深さは15cmほどと浅い。埋土上層からは土器が出土している。132は壺の胴部である。頸部から上が欠損しているため形式は不明である。133は甕の底部と思われる。出土した土器は胎土などがSA1出土の土器と類似しており、同時期に近いものと思われる。しかし埋土下層から出土した遺物はなく、後世の攪乱時に混入した可能性もある。



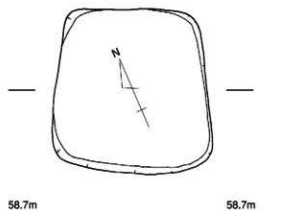
第24図 SA1出土銅鏡実測図 (1/1)



第25図 SC1・2、出土遺物実測図 (SC1・1/40) (SC2・132~134、1/4)

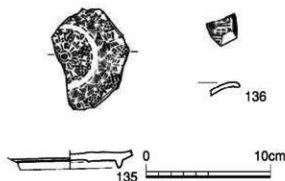
SC2 (第25図)

SC1の南で検出された。非常に小さく検出時には8cmほどであった。中からは完形のミニチュア甕(134)が横位で出土している。単なるの窪みに土器が落ち込んだ可能性もあるが、今回の調査ではSA1上面以外では検出時に当該期の土器が出土しなかったことから土坑の痕跡であると判断した。出土した鉢形のミニチュア土器は器高が5cmほどであり、内外面には指押さえの跡が残る。



第4節 近世以降の遺構と遺物

近世以降の遺構は第Ⅲb層上面で溝状遺構7条、土坑1基を検出した。またビット状の土坑も数多く検出されたが、いずれも掘立柱建物が復元できるものはないため、ビットと認定はしていない。検出されたビット状の土坑は一辺15cm未満の方形を呈するものが大半で、埋土はしまりのない黒色をしていた。いずれも浅く、20cm程度である。遺物は1点のみ出土し、18世紀代の薩摩窯系の土瓶片が出土している。遺物はK-Ah上面での検出時に第Ⅱ層中から出土したが、細片が多いため遺構から出土したもの以外は図化はしていない。出土した遺物の傾向としては、椀類が多く、時期は近世後半から新しいものでは昭和期のもも含まれている。



第26図 SC3、出土遺物実測図 (SC3・1/20) (135・136、1/3)

1 土坑 (SC)

SC 3 (第26図)

調査区北東部から土坑 1 基が検出されている。平面形は90cm×80cmのほぼ正方形で、深さは30cmを測る。壁面はほぼ垂直となり、埋土はしまりの無い黒褐色であった。底に近いところからは頭大の石と明治代の陶器片 (図135・136) が出土している。当時のゴミ穴と考えられる。

2 溝状遺構 (SE)

SE 1・SE 2 (第27図)

検出された溝状遺構の中で最も北側に位置する。いずれも幅20cm程度、深さ5cm～10cmと浅く、断面は台形を呈している。両溝が直交する部分は確認トレンチのため不明瞭であった。埋土は黒褐色土と黒色土からなり、前者は基本土層の第 I b 層、後者は第 II 層に対応する。また遺物は出土しなかった。

SE 3～SE 5 (第27図)

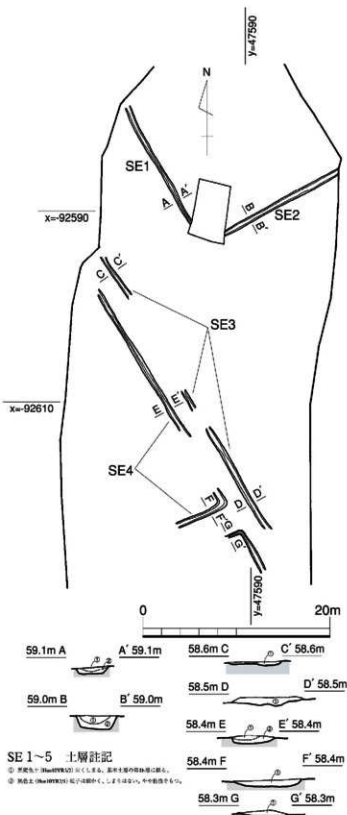
SE 1・SE 2の南側に位置し北西方向に走る溝である。K-Ah上面での検出時点では溝の痕跡程度しか残っておらず、最も深い部分でも5cm程度であった。これらの溝群はSE 1と方向がほぼ一致し、SE 4とSE 5は直角に曲がり南西方向に走る。溝と溝の間は約2mで、硬化面は認められなかった。埋土はSE 1・SE 2と一致する。出土遺物は無い。

SE 6 (第28図)

SE 7の北側に位置する。ほぼ直角に曲がる溝で、東側では溝が一部切れているのが認められる。溝の形態は先述の溝と共通する部分が多いが、方位は若干西側に振れるようである。出土遺物は無い。

SE 7 (第28図)

調査区の最も南側に位置する北東方向に走る溝である。幅は約40cm、約20cmと他の溝に比べ深い。出土遺物は下層から陶器片 (137)、上層から須恵器片 (138)、また図化はしていないが土人形片が出土している。137の陶器片は碗の口縁部で見込み部に文様が入る。138の須恵器は細片のため器種・時期とも



第27図 SE 1～5 分布図 (1/400)

に不明だが本遺跡に須恵器を伴う時期の遺構は無く、周辺に当該期の遺構の存在を窺わせる資料である。

3 遺構の時期と性格

ここでは検出された溝状遺構の時期と性格について考えてみたい。検出された溝状遺構は7条であった。溝状遺構の時期については出土遺物が少量なため、不確定な部分が多いが、SE7出土の遺物や周辺包含層からの遺物も考慮に入れると、その時期は近世後半以降と考えられる。その性格については道路状遺構の可能性があり、北側に隣接する湯牟田遺跡からも12条の道路状遺構が検出されている⁹⁵。しかし、湯牟田遺跡検出のものとはその形状や方位に大きな差異があり、また西ノ別府遺跡の溝状遺構からは硬化面も確認されなかったため同一遺構の可能性はないであろう。また何らかの施設に伴う区画溝などの可能性もあるが、建物跡が確認されていないため、その可能性も低いと考えられる。よって、こ

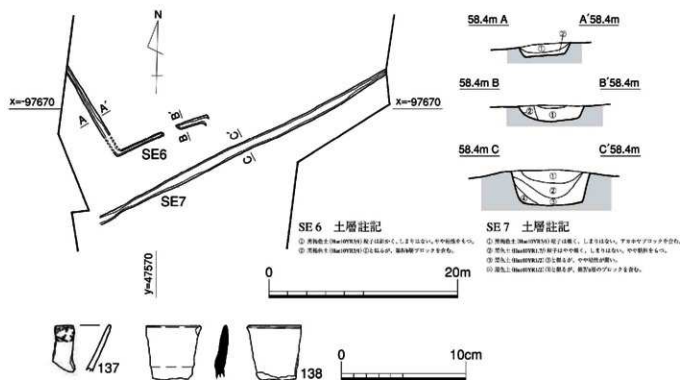
では田畑用の水路などの農作業に伴う溝であると判断したい。

【註】

(1) 高岡町の久木野遺跡では散敷と集石遺構との接合が確認されている。

高岡町教育委員会 1997 『久木野遺跡（1区～4区）』平成5年度県営農地保全整備事業（一里山地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

(2) 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『湯牟田遺跡（一次調査）』東九州自動車道（都農～西都門）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書15



第28図 SE6・7分布図、出土遺物実測図 (SE6・7、1/400)
(137・138、1/3)

第Ⅵ章 まとめ

本遺跡では少数ながら、複数時期にわたる遺構・遺物を確認した。各時期における個別の遺構・遺物については第Ⅴ章で説明したが、今章では今回確認された旧石器時代、縄文時代早期、古墳時代前期の遺構・遺物について若干の言及を加えることでまとめたい。

第1節 旧石器時代

本遺跡における旧石器時代の調査は、調査範囲をかなり限定していたため、出土した遺物は総数15点と少数である。

第Ⅴ層上位から中位にかけては10点の遺物が出土したが、いずれも流紋岩製であり、ホルンフェルス製の石器は確認できなかった。本遺跡のすぐ南を流れる小丸川では容易にホルンフェルスを採集することが出来、宮崎平野においてはホルンフェルス製石器が高い割合で出土している¹⁰。総出土数は少ないながらもホルンフェルス製石器が出土しなかったことは特徴の一つといえる。出土したナイフ形石器は小型の縦長剥片を素材にしたものである。近年、発表された宮崎県下における10段階編年では7期に相当する資料である¹¹。

第2節 縄文時代早期

当時期の遺構・遺物として集石遺構13基、チャート剥片集中区1箇所、土器片約80点、石器・剥片約450点を確認した。ここでは集石遺構と出土土器について言及する。

集石遺構

集石遺構は13基確認したが、傾向として掘込みや配石や持たないタイプが多く、掘込みを有しても浅い集石遺構が目立つ。本遺跡の所在する川南町では東九州自動車道関係の発掘調査が行われ、それに伴い町内の縄文時代早期における集石遺構の資料数も増加している¹²。しかし、調査中の遺跡や報告書が

まだ刊行されていない遺跡もあり、本遺跡の集石遺構の位置付けを行うには不十分な面も多い。ここでは本遺跡に近接する尾花坂上遺跡検出の集石遺構との比較・検討からその特徴を見出すこととする。

尾花坂上遺跡¹³は児湯郡川南町大字川南字尾花に所在している。高城段丘面の縁辺部に位置し、本遺跡とは直線距離にして約400mしか離れていない。平成15年に調査が行われ、380㎡の調査面積から34基の集石遺構が検出されている。集石遺構は主に2群の散礫の下から検出されており、その散礫は黒褐色土上面検出のもの、その下層である黄灰褐色土上面検出のものに分かれる。黒褐色層と黄灰褐色層はそれぞれ西ノ別府遺跡の第Ⅳ層と第Ⅴ層に相当すると考えられる。検出された集石遺構は本遺跡同様に、掘込み・配石の有無から3通りに分類し、さらに掘込みのみを有する集石遺構については掘込みの長軸・深さと礫密度からさらに3通りに細分されている。報告書では最後にまとめの中で集石遺構の構成礫の分類から、いわゆる準備礫・廃棄礫の可能性のあるタイプを抽出しているが、本遺跡で用いた礫の分類は、礫の使用頻度から使用段階を抽出出来るような精度では無いため、集石遺構の構造と時期についてのみ比較・検討を行う。

先述のように、尾花坂上遺跡の集石遺構は検出層位の異なる2群の散礫の下から検出されたものが大半を占める。報告書のまとめの中では両散礫の下から検出された集石遺構には若干の時期差があるのではないかと言及している。表1は本遺跡と尾花坂上遺跡で検出された集石遺構の分類ごとの割合である。分類は本遺跡の表記に従い、尾花坂上遺跡で用いられた掘込みや礫密度によるB類の細分類は一括してB類に含めている。また尾花坂上遺跡の散礫1下検出の集石遺構を1群集石遺構、散礫2下検出を2群集石遺構と呼称し、西ノ別府遺跡検出の集石遺構との比較・検討を進める事とする。

両遺跡の違いとして、A類、C類の割合の差が認められる。西ノ別府遺跡ではA類の割合が5割近いのに対し、尾花坂上遺跡では両群とも3割前後と

表1 西ノ別府遺跡と尾花坂上遺跡との集石遺構の比較

	西ノ別府遺跡 (散雑1下)	尾花坂上遺跡 (散雑1下)	尾花坂上遺跡 (散雑2下)
A類	6 (46%)	6 (28%)	4 (33%)
B類	5 (39%)	7 (32%)	8 (64%)
C類	2 (15%)	9 (40%)	0 (0%)
合計	13	22	12

	西ノ別府遺跡	尾花坂上遺跡 (散雑1下)	尾花坂上遺跡 (散雑2下)
掘込長軸平均値(cm)	113.5	139.4	75.4
掘込深さ平均値(cm)	14.0	29.75	20.4

なっている。C類では西ノ別府遺跡が2割以下なのに対し、尾花坂上遺跡の1群集石遺構は4割となり、分類の中で最も高い割合を占める。逆に2群集石遺構ではC類は認められない。次に掘込みの長軸・深さを見ると、尾花坂上遺跡では1群集石遺構に比べ2群集石遺構は長軸・深さともに大幅に減少している。西ノ別府遺跡では平均長軸は2群集石遺構より大きい、深さは1群集石遺構の1/2以下である。このような形態差は何に起因するものであろうか。ここでは要因の一つとして時期差を考えてみたい。両遺跡の集石遺構の時期について見てみることにする。

尾花坂上遺跡では集石遺構内から土器が出土しており、1群集石遺構からは押型文土器・貝殻文系土器・無文土器、2群集石遺構からは貝殻文系土器が出土している。いずれも細片のため、型式等の判別は困難である。しかし1群集石遺構のなかの1基から出土した押型文土器は口縁部片であり、外面に楕円押型文、内面には上部に原体条痕、その下には楕円押型文が施されており、下管生B式土器に相当するものと考えられる。この土器が出土した集石遺構の残存状況は良好ではなく、使用後に土器が混入した可能性がある。しかし、1群集石遺構の分布する箇所は黒褐色層からは同型式の土器片や辻タイプの貝殻文系土器が出土しており、1群集石遺構が両型式の土器に伴うものである可能性が高い。2群集石遺構からは貝殻文系土器2点しか出土していないため時期は不明だが、黒褐色土下の黄灰褐色土層中の検出であるため、1群集石遺構より時期は上がると考えられる。

次に西ノ別府遺跡についてみてみることにする。第V章で触れたとおり、集石遺構内から出土した土器は認められなかった。よってここでは包含層出土

の土器から、集石遺構の時期を検討していく。

出土土器

縄文時代早期における出土土器は80点だが、無文の胴部の細片が大半のため型式の判別は困難である。ここでは第IV層下位から出土した押型文土器から時期の推定を行う。

第IV層下位からは5点の押型文土器が出土しているが、細片が多く16の土器（第18図）についてのみ検討を行う。16の土器片はSI6から南東に10mほど離れた箇所から出土し、出土層は集石遺構と同じ第IV層下位である。外面調整は横位のやや間延びした山形文を施し、内面はナデ調整のみとなっている。器形はやや内湾しながらも直線状に外に開き、口唇部は角状となる。このような特徴を持つ土器は貝殻文円筒形土器との接触によって出現した「弘法原式土器」と設定され、時期は稲荷山式と併行関係で北部・中九州における最古段階の押型文土器であるとされる²⁶。この出土土器から西ノ別府遺跡における集石遺構の使用時期は稲荷山併行期が想定され、尾花坂上遺跡の1群集石遺構とは時期差が認められる。西ノ別府遺跡検出の集石遺構は尾花坂上遺跡の1群集石遺構より時期は古いこととなり、両者の間にみられた構造の差異は時期差に起因する可能性がある。

以上、両遺跡間の集石遺構には時期差が認められ、また両遺跡の比較から下管生B式期の集石遺構に比べ、稲荷山併行期の集石遺構は掘込み・配石を持たないものが多く、また掘込みの深さも浅いことが指摘できる。これは尾花坂上遺跡の2群集石遺構の構造とも合致するものである。しかし、これは2遺跡間の時期差からのみの比較であり、立地等他の要因についての検討をしていないためひどく脆弱な見解である。また縄文時代早期の集石遺構の構造は、遺

構内の出土の土器型式に問わず様々な多様性があることが指摘されている。今後は川南町内における資料の増加を待ち、再度検討することとしたい。

第3節 古墳時代前期

古墳時代前期の遺構として竪穴住居跡1軒、土坑2基を検出した。その中でも竪穴住居跡から出土した多量の土器と仿製重圏文鏡は特筆されるものである。ここでは出土遺物に重点を置きつつ検討を行う。

出土土器

西ノ別府遺跡の竪穴住居跡から出土した土器は良好な一括資料で、宮崎平野北部における土師器編年の基礎資料に成り得るものである。宮崎県の土師器編年として松永幸寿氏の論考がある⁹⁾。ここでは松永氏の論考を参考に、編年の基準となっている甕について分類をし、その位置付けを行う。分類の対象とした住居跡内土坑出土の甕も含めた口縁部から胴部にかけて残存している23個体である。分類基準は外面調整・口縁部形態・胴部形態により行った。表2は分類した結果である。

Aa1類 (42・44・51・70・71)

外面調整はハケ・ナデ調整のみで、長胴の胴部を持ち口縁部は直線的に外側にのびるタイプである。いわゆる在地系の甕に相当するものである。

Aa2類 (41・72~74)

口縁部が外反するものである。床面出土の甕のみが相当する。口縁部は上位付近で外側に折り曲げられている。

Ab1類 (45・46・49・50)

胴部形態が球形を呈するものである。これらの個体は口縁部径と胴部最大径はほぼ等しく、他の類形に比べ短い口縁部を伴う。床面からは出土していない。

表2 SA1出土甕 分類表

Aa1類	42・43・44・51・70・71	Ba1類	54・55・59
Aa2類	41・72・73・74	Ba2類	56・57・58・60・61
Ab1類	45・46・49・50		
Ac2類	48		

分類基準	外面調整	A類	ハケ・ナデ	B類	タタキ		
	胴部形態	a類	長胴	b類	球形	c類	卵形
	口縁部形態	1類	直線	2類	外反		

Ac2類 (48)

胴部の中位に最大径をもち、短い口縁部は強く外反している。他の類形より後出する要素をもつ個体である。

Ba1類 (54・55・59)

外面調整にタタキを施し、胴部形態は長胴、口縁部が直線的にのびるタイプである。器形はAa1類とはほぼ同形であるが、やや長い口縁部をもつ。

Ba2類 (56~58・60・61)

外反する口縁部をもつ。そのなかでも口縁部上位で折り曲げられるもの(56・58・60)と外反するもの(57・61)に分けられる。

以上、外面調整・胴部形態・口縁部形態の3要素から出土した甕は6類型に抽出する事が出来た。傾向としては床面出土の甕はいずれの長胴形の胴部をもち、口縁部は外反もしくは上部付近で屈折するAa2類が多く認められる。このような口縁部上部付近で屈折するものは宮崎市熊野原遺跡C地区SA7・SA12出土の甕にも認める事が出来る¹⁰⁾。熊野原遺跡出土の甕も長胴で口縁部が外反または屈折する甕が主体を占めるなど共通する要素が多い。近接した時期が想定される。

一括廃棄された甕は多様な形態をもつが、タタキを施す甕には球形・卵形の胴部は認められなかった。本遺跡のように一定数のタタキ調整の甕が出土した遺跡としては新富町上箇遺跡がある¹¹⁾。上箇遺跡F地区SA10からはタタキを施した甕が出土しているが本遺跡同様に長胴の胴部をもち、底部もわずかな平底またはレンズ状となっている。しかし口縁部形

態には違いが認められる。本遺跡の甕は上蓋遺跡のものに比べ短く、強く外反しており若干古いと考えられる。

次に出土土器の時期決定を行う。時期の決定には松永氏の編年を使用する³⁰。松永氏は在地系中型甕の底部形態・口縁部の長さ・口縁部角度の3属性を基準に編年案を作成した。その中でも底部形態が最も大きな指標になるとした。住居跡床面出土の甕の底部に着目すると、床面付近では確認できる底部数が少ない上に上底、平底、レンズ状と3通りの底部が存在し、時期決定が困難である。よって、個体数も多い一括廃棄の甕の底部形態から時期決定を行う。一括廃棄された甕の底部は大部分が僅かな平底かレンズ状の底部を呈している。また小型丸底甕も含まれていることから松永編年の6期～7期が想定されるが、底部に若干上底ぎみのものも認められることから6期に相当すると考えられる。これに対し、床面出土の甕は口縁部角度がきつく頸部の稜を明瞭なことから5期に相当するであろう。この時期は先述した熊野原遺跡C地区SA7・SA12や上蓋遺跡F地区SA10の土器の年代とも大きな差異は認められない。

このことから検出された竪穴住居跡の時期は松永編年の5期が与えられ、畿内編年では布留式の1～2式に併行する。実年代としては4世紀第1四半期～第2四半期に相当するものである³¹。

仿製重圏文鏡

今回の仿製重圏文鏡の出土により、県内における竪穴住居跡内からの鏡の出土例は西ノ別府遺跡を加え5例目³²となった。表3は県内における住居跡内鏡出土遺跡の一覧表である。他の遺跡の出土鏡をみ

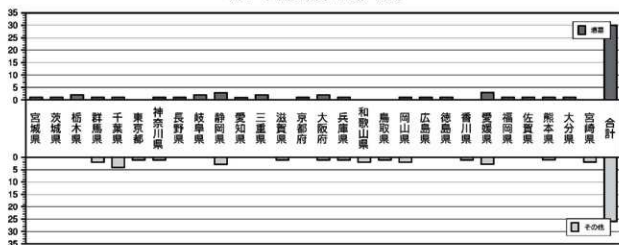
るといずれも舶載鏡の破鏡で、仿製鏡は出土していない。また時期も弥生時代後期から終末期にかけてで古墳時代まで時期の下る資料は認められない。また鏡が出土した住居跡の規模も他の住居跡に比べ大型である傾向は認められなかった。

宮崎県における仿製重圏文鏡の出土は今回が2例目である³³。平成6年刊行の国立歴史民族博物館の「日本出土鏡データ集」によると重圏文鏡、もしくはその可能性が高い鏡は東は宮城県から西は熊本県まで計56例の出土が確認されている。表4は県ごとの出土面数と墳墓出土のものと同墳墓以外の遺構出土のものにわけてグラフ化したものである。それによると最も出土面数の多い県は静岡県と愛媛県の6面で、その分布の中心は東海から関東にかけてであるが、西日本にも一定数認められる。重圏文鏡の出土傾向としては墳墓とその他の遺構出土の面数には大きな差は認められない。このような墳墓以外からの出土量の多さは重圏文鏡のもつ特徴の一つであり、それは重圏文鏡が弥生時代の小型仿製重圏文鏡との関係をもち、儀鏡としての役割を有する³⁴ことが関係していると考えられる。墳墓以外では竪穴住居跡や井戸、河川などからの出土が認められる³⁵。西ノ別府遺跡と同様に竪穴住居跡から出土した例として岡山県津寺遺跡が挙げられる³⁶。津寺遺跡は弥生時代から中・近世にわたる複合遺跡で古墳時代では竪穴住居跡93軒や多数の土坑が確認されている。重圏文鏡は古墳時代前期の竪穴住居跡から1面、土坑から1面いずれもほぼ完形で出土しており、この他にも内行花文鏡の破鏡が同じく竪穴住居跡から出土している。出土状況としてはいずれの鏡も埋土中からの出土であり、遺構廃棄後のものであることを物語っている³⁷。意図的に置かれたのか、投げ込まれたの

表3 宮崎県内 鏡出土住居一覧表

遺跡名	所在地	鏡式名	鏡年代	依存度・口径	出土遺構	床面積(m ²)	遺構年代
神殿遺跡A地区	高千穂町	内行花文鏡?	後漢鏡?	破鏡	SA10	19.8	弥生時代終末期
松本原遺跡	西都市	不明		破鏡	竪穴住居	不明	弥生時代後期
鏡代ヶ追遺跡	新富町	内行花文鏡? 方各規矩鏡?	後漢鏡	破鏡	SA9	12.9	弥生時代後期
下那珂遺跡	佐土原町	鳳文鏡	前漢鏡	破鏡	SA96	6.4	弥生時代後期～終末期
西ノ別府遺跡	川南町	重圏文鏡	仿製鏡	完形	SA1	36	古墳時代前期

表4 重圏文鏡出土地域一覧表



かの判別は困難だが、当時の鏡の扱いを示す貴重な資料であろう。それに対し西ノ別府遺跡の重圏文鏡はほぼ床面からの出土であり、津寺遺跡の状況とは異なるようである。西ノ別府遺跡では鏡の周囲から小型の土器が出土しており、この場所では何らかの祭祀²⁷⁾を行った後、廃棄された可能性を想定したい。

重圏文鏡は九州には類例が少なく、どのようなルートで西ノ別府遺跡にわたってきたかは现阶段で指摘するのは不可能である。ここでは、可能性の一つとして瀬戸内地方を介しての伝播は挙げておきたい。九州と瀬戸内地方は旧石器時代よりその交流があったが、顕著に認められるようになったのは弥生時代中期以降になってからである。代表的なものとして凹線土器や矢羽根透かしをもつ高坏などがあり、宮崎のいくつかの遺跡で確認することが出来る²⁸⁾。西ノ別府出土の土器からは瀬戸内地方との関係は見いだせないが、竪穴住居跡の平面形は1辺の中央が脹らむ五角形に近い形を呈し、先述の津寺遺跡の竪穴住居跡にも類似した平面形を認めることが出来る²⁹⁾。また愛媛県における出土重圏文鏡の多さも示唆に富むものである。

第4節 おわりに

以上、旧石器時代・縄文時代早期・古墳時代前期の特徴的な遺構・遺物について説明を行ったが、乱

雑でまとまりのない文章となってしまった。特に竪穴住居跡出土の遺物については良好な資料であるにもかかわらず、表面をなぞるだけのまとめとなってしまったことをお詫びしたい。今後、機会があれば改めて検討をしたいと思っている。

今回の調査では少ない遺構・遺物ながらも、貴重な資料を得ることが出来た。特にSA1から出土した仿製重圏文鏡は県内の古墳時代を考える上での重要な資料になり得るだろう。

古墳時代における西ノ別府遺跡の位置付けは现阶段では不明瞭であると言わざるを得ない。検出された竪穴住居跡は1軒のみであったが、単独で存在していたとは考えにくく、集落の一部分の可能性は高い。しかし他の住居跡からは離れており、何らかの隔絶性をもつ住居跡であったといえる。

これまでに何回も触れてきたが、近年の東九州自動車道建設に伴い、川南町内における発掘調査が行われている。特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけては集落跡の調査が行われ、良好な資料が蓄積されつつある。今後、その資料を比較・検討することにより西ノ別府遺跡の位置付けもより明らかになることであろう。

【註】

- (1) 松田清孝 2004 「小丸川流域流石器石材の同定」『宮崎県総合博物館研究紀要』第25輯 宮崎県総合博物館
- (2) 宮崎旧石器文化談話会 2005 「宮崎県下の旧石器時代概観」『旧石器考古学』66
- (3) 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『東九州自動車道(都農～西都農)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書』VI
- (4) 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『尾花坂上遺跡』一般県道高鍋美々津線地方道路交付金事業(鬼ヶ久保工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- (5) 水ノ江和同 1998 「九州における押型土器の地域性」『九州の押型土器—論叢編—』編文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- (6) 松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野を中心として—」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(1)
- (7) 宮崎県教育委員会 1985 「浦田遺跡」『草場東遺跡』「熊野原遺跡(C地区)」『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第2集
- (8) 新富町教育委員会 1995 「上蘭遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集
- (9) 前掲6
- (10) 寺沢薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊 奈良県権原考古学研究所
- (11) 表土中からの出土であるが、生目古墳群の範囲確認調査で、高倉洋彰氏の分類で小形仿製鏡第Ⅰ型a類に比定される小型鏡が出土している。
宮崎市教育委員会 1996 『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』
- (12) 平成6年刊行の国立歴史民族博物館の「日本出土鏡データ集成」によると宮崎市の岩戸神社に伝世品として重圏文鏡1面の記載がある。実見はしていないがデータによると径が18.2cmもあり仿製重圏文鏡では無い可能性が高い。
- (13) 高倉洋彰 1999 「儀鏡の誕生」『考古学ジャーナル』No446
- (14) 井戸から出土した例としては兵庫県明石市藤江別所遺跡があり、河川から出土した例としては香川県高松市居石

遺跡が挙げられる。

- 明石市立文化博物館 1992 『発掘された明石の歴史展—藤江別所遺跡—』
高松市教育委員会 1995 『居石遺跡』一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊
- (15) 岡山県教育委員会 1996 『津寺遺跡3(本文編)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104
 - 岡山県教育委員会 1998 『津寺遺跡5(第1分冊)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127
 - (16) 出土した重圏文鏡はいずれも埋土上位からの出土であり、遺構廃絶後から時間をおいて投棄されたと考えられる。
 - (17) 前掲(15)のなかで、執筆者の金田氏は重圏文鏡が井戸や河川口付近の祭祀遺構からの出土が認められることから、重圏文鏡が水の安定供給や海上の航海安全の祭祀に重要な役割を担っており、このような場所から出土するものは墳墓や竪穴住居跡から出土するものより後出する傾向がうかがえると指摘している。しかし西ノ別府遺跡ではどのような祭祀に用いたかは現段階では不明である。
 - (18) 破鏡が出土した西都市清水松本原遺跡からも矢羽根透かしをもつ高坏が出土している。
 - (19) 41号竪穴住居跡や252号竪穴住居跡が五角形を呈しており、数は少ないが古墳時代前期では平面プランの一つとして採用されていたことがうかがえる。

表5 竪穴住居跡及び土坑計測表

遺構番号	検出グリッド	方位	平面形	規模 (cm)			面積 (㎡)
				長さ	幅	深さ	
SA 1	B11	N-42-E	隅丸方形	600	600	54	36
SC 1	B10	N-7-W	5角形	80	54	10	0.43
SC 2	B11	N-12-W	隅丸方形	8.8	8	4.8	0.007
SC 3	D5	N-24-E	方形	98	82	22	0.72

表6 集石遺構観察表

遺構番号	検出グリッド	配石	掘込	掘込			構成礫	炭化物	備考
				長さ	短径	深さ			
SI 1	A11	×	×	-	-	-	○	×	礫周辺に覆土は無し。炭化物有無は不明。
SI 2	A12	×	×	-	-	-	○	○	炭化物は少量。
SI 3	A12	×	×	-	-	-	○	○	炭化物は少量。掘り込みはなく、浅いくぼみに石が集中している。
SI 4	A12	×	×	-	-	-	○	×	SI2と近接。
SI 5	B11	×	×	-	-	-	○	○	炭化物は少量。SI1内検出
SI 6	B10	×	○	126	113	15	○	○	数礫1下から出土。炭化物量不明
SI 7	A12	×	○	103	86	9	○	○	礫密度は少ない
SI 8	A14	×	○	90	77	7	○	○	掘り込みはとも浅く、炭化物も少ない。礫密度は低い。
SI 9	B14	×	○	126	85	15	○	○	炭化物は多い。
SI 10	B14	×	○	105	103	13	○	○	炭化物、礫密度は多くない。
SI 11	A14	○	○	139	119	19	○	○	数礫3の下から検出。上部は数礫内か。炭化物は多量。
SI 12	B14	○	○	106	91	20	○	○	炭化物は多量で、比較的良くつまる。
SI 13	B14	×	×	-	-	-	○	○	炭化物は少量で、礫密度は多くはない。

表7 集石遺構構成礫計測表

礫分類基準	未赤化		赤化		
	①	③	⑤	⑦	
円礫	②	④	⑥	⑧	大型
角礫	⑨	⑩	⑪	⑫	小型

遺構番号	①kg								円礫合計 (①②③④)	赤化合計 (⑤⑥⑦⑧)	総計	備考
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧				
SI 1	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	0.2	5.6	2.6	5.0	13.2	13.2	礫は大形が多い。すべて赤化。
SI 2	0.0	0.8	0.0	0.4	6.2	0.8	8.8	1.4	7.8	17.2	18.4	赤化礫9割弱。礫は大形が中心。
SI 3	0.0	7.0	0.4	5.8	1.2	22.6	1.8	31.8	30.8	57.4	71.8	赤化割合8割弱。礫は大形が中心。
SI 4	0.0	1.0	0.0	0.8	0.4	5.0	0.2	5.4	6.4	11.0	12.8	赤化が8割強。重量は少ない。
SI 5	0.0	0.2	0.0	0.4	7.2	0.8	5.6	6.6	8.2	20.2	20.8	赤化礫9割強。大形円礫多い。
SI 6	0.6	7.6	0.2	9.0	4.8	24.2	2.2	35.2	37.2	66.4	83.8	赤化礫が8割弱。角礫が多い。
SI 7	0.8	5.0	0.6	4.8	4.4	19.8	2.2	24.8	30.0	51.2	62.4	赤化礫が8割。小形が多い。
SI 8	0.0	2.4	1.4	4.0	4.6	5.2	6.4	10.0	12.2	26.2	34.0	赤化礫8割弱。角礫多い。土層含む
SI 9	0.8	1.0	1.2	4.8	0.0	1.4	0.0	7.8	3.2	9.2	17.0	赤化礫5割強。小形角礫が多い。
SI 10	0.0	3.8	0.0	1.4	1.6	14.2	1.2	7.0	19.6	24.0	29.2	赤化礫8割。円少し多い。土層含む
SI 11	0.0	3.4	0.4	6.4	2.2	8.4	0.0	18.6	14.0	29.2	39.4	赤化礫7割中。小形が多いが配石は巨石。上部は散礫除去時に外れる。
SI 12	1.0	4.4	0.2	6.2	22.4	12.2	9.2	15.0	40.0	58.8	70.6	赤化礫8割。礫は大形が多い。尾跡は少ない。砂岩中心
SI 13	0.0	4.6	0.0	3.6	8.2	29.4	2.8	20.8	42.2	61.2	69.4	赤化は9割弱。円礫中心で礫はやや大形が大平を占めるが、特別大形のもの無し。

表8 旧石器時代石器計測表

遺物番号	器種	出土位置/層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	ナイフ形石器	V層上面	流紋岩	3.5	2.8	0.7	3.5	
2	ナイフ形石器	V層上面	流紋岩	2.9	1.7	0.8	3.6	
3	ナイフ形石器	V層上面	流紋岩	2.0	1.4	0.5	0.9	
4	ナイフ形石器	V層上面	流紋岩	2.1	1.0	0.6	0.8	
5	剥片	V層上面	流紋岩	2.9	1.7	0.8	3.6	
6	剥片	V層上面	流紋岩	3.9	1.6	1.2	5.3	
7	剥片	V層上面	流紋岩	1.7	2.3	0.9	3.2	
8	剥片	V層上面	流紋岩	1.2	1.3	0.6	0.9	
9	剥片	V層中位	流紋岩	3.6	2.1	0.8	5.7	
10	剥片	V層中位	流紋岩	3.2	2.0	0.9	4.7	
11	石核	V層下位	ホルンフェルス	12.2	9.0	5.4	890.2	
12	剥片	V層下位	ホルンフェルス	7.1	7.7	1.8	51.4	
13	剥片	V層下位	ホルンフェルス	12.5	3.6	3.7	179.4	
14	剥片	V層下位	ホルンフェルス	9.3	6.2	2.9	159.8	
15	剥片	V層下位	ホルンフェルス	3.7	4.3	2.5	42.6	

表9 縄文時代早期石器計測表

遺物番号	器種	出土位置/層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
28	磨製石斧未製品	散雑3	ホルンフェルス	10.8	6.3	2.9	329.8	
29	打製石鏃	IV層下位	チャート	3.0	1.6	0.4	1.4	
30	打製石鏃	IV層下位	チャート	3.2	1.6	0.5	1.9	
31	石核	IV層下位	黒曜石(桑ノ木津留)	2.8	2.4	1.2	7.1	
32	打製石鏃	IV層下位	チャート	2.4	2.2	0.2	0.9	
33	打製石鏃	IV層下位	チャート	2.6	1.5	0.4	1.0	
34	打製石鏃	IV層下位	チャート	3.0	1.4	0.4	1.4	
35	打製石鏃	IV層下位	黒曜石(姫島)	1.4	1.2	0.3	0.3	
36	打製石鏃	IV層下位	ホルンフェルス	1.4	1.7	0.3	0.4	
37	打製石鏃	IV層下位	チャート	1.2	1.1	0.3	0.5	
38	打製石鏃	V層上面	黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.5	
39	打製石鏃	V層上面	チャート	1.4	2.1	0.3	0.6	
40	打製石鏃	V層上面	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	(2.5)	0.3	1.1	

表10 SA1出土石器計測表

遺物番号	器種	出土位置/層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
112	磨石	SA1	尾鈴山酸性岩類	12.0	9.9	5.4	974.4	
113	磨石	SA1	尾鈴山酸性岩類	8.3	7.9	3.6	356.1	
114	磨石か	SA1	砂岩	7.3	4.4	3.4	152.2	
115	磨石	SA1	尾鈴山酸性岩類	9.3	10.3	5.8	851.5	
116	磨石か	SA1	尾鈴山酸性岩類	6.5	5.3	2.0	104.8	
117	磨石か	SA1	砂岩	5.5	4.6	4.4	150.6	
118	磨石	SA1	砂岩	10.3	4.6	2.8	207.6	
119	礫石	SA1	砂岩	5.0	6.2	0.9	42.2	
120	礫石	SA1	ホルンフェルス	113.8	7.1	4.0	596.1	
120	台石	SA1	尾鈴山酸性岩類	16.0	8.6	5.5	1023.4	
121	磨石か	SA1	砂岩	9.7	9.3	5.6	556.5	
122	礫石	SA1	砂岩	10.4	5.1	1.9	146.5	
123	礫石塊	SA1	礫石	11.3	7.7	5.6	104.4	
124	打製石包丁	SA1	ホルンフェルス	6.4	4.2	0.6	23.5	
125	不明磨製石製品	SA1	ホルンフェルス	2.7	2.0	0.5	3.3	
126	台石	SA1	尾鈴山酸性岩類	27.2	12.3	6.8	3000.0	
127	台石	SA1	尾鈴山酸性岩類	20.9	10.0	5.4	1305.0	
128	台石か	SA1	砂岩	17.9	9.9	6.0	1468.2	
129	台石	SA1	ホルンフェルス	19.5	10.1	4.9	1329.1	

表11 SA1出土土器観察表 1

番号	器種	器種部位	出土地点	位置 (cm)			手法・素材・文様様式		焼成	色		胎土の特徴	備考
				高さ	口径	底径	外	内		外	内		
16	深鉢	口縁～胴部					縦方向の山形押痕文・種乳あり	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・灰・黄色片状物を含む	
17	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・黄色片状物を含む	
18	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・黄色片状物を含む	
19	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・黄色片状物を含む	
20	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・2ミリ以下の乳白・黄色片状物を含む	
21	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・1ミリ以下の黄色片状物	
22	深鉢	口縁					縦方向のナブ	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の灰・1ミリ以下の黄色片状物	
23	深鉢	口縁					縦方向のナブ	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄色片状物	スズ付着
24	深鉢	胴部					縦方向のナブ	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の白色・1ミリ以下の黄色片状物	
25	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白色	
26	深鉢	胴部～底部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白色	
27	深鉢	胴部					縦方向の山形押痕文	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の乳白・黄色片状物	
42	浅	底部	SA1	26.4	3.1	30.6	縦線はハケ目跡ナブナブ。表面は縦方向の山形押痕文・種乳あり	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の乳白・黄色片状物を含む	スズ付着 内底面
43	浅	底部	SA1	26.1	4.3	31.1	縦線はハケ目跡ナブナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	6ミリ以下の黄・灰色・赤褐色片状物・種乳	内底面
44	浅	底部	SA1	24.6	2.9	26.1	縦線は縦方向のハケ目。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄・赤褐色片状物	内底面
45	浅	底部	SA1	20.5	3.8	30.0	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の乳白・黄褐色片状物	スズ付着
46	浅	口縁～胴部	SA1	29.4			縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・白色片状物	スズ付着
47	浅	底部	SA1		3.2		縦方向の丁寧ナブ	ナブ・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・白色片状物	スズ付着
48	浅	口縁～底部	SA1	23.0	2.2	28.9	縦線はハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は丁寧ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の乳白・黄褐色片状物	スズ付着 内底面
49	浅	口縁～胴部	SA1	28.0			縦線は縦・斜方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・白・赤褐色片状物	スズ付着
50	浅	口縁～胴部	SA1	27.0			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・赤褐色片状物	内底面
51	浅	口縁～胴部	SA1	16.5			縦線はハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線はハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
52	浅	底部	SA1				工具によるナブ上げ	ハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 底面
53	浅	底部	SA1				ていねいなナブ	ナブ・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	内底面
54	浅	口縁～底部	SA1	26.4	3.1	31.2	縦線はナブ。一部ナブナブナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線はハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・白色片状物	スズ付着
55	浅	口縁～底部	SA1	28.9	2.9	32.3	縦線はナブ。縦線・縦線は少量の種乳あり	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
56	浅	口縁～底部	SA1	26.8	2.4	31.0	縦線は少量の種乳あり。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
57	浅	口縁～底部	SA1	23.6	1.7	27.4	縦線はナブ。縦線はナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
58	浅	口縁～底部	SA1	28.5	2.2	31.4	縦線はナブ。縦線はナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
59	浅	口縁～胴部	SA1	19.0			タナキ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
60	浅	口縁～胴部	SA1	28.0			縦線は縦・斜方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
61	浅	口縁～底部	SA1	24.9			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
62	浅	胴部～底部	SA1		2.7		縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
63			SA1				縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
64	浅	口縁～胴部	SA1	(17.1)			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
65	浅	胴部～胴部	SA1				ハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	4ミリ以下の黄・赤褐色片状物	貼り付着
66	浅	口縁～底部	SA1	13.1	15.3		縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄褐色・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
67	浅	口縁～底部	SA1	13.9	1.0	15.1	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄褐色・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
68	浅	胴部～底部	SA1				縦方向の丁寧ナブ	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
69	浅	底部	SA1				縦線はハケ目跡ナブ	ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の黄・赤褐色片状物	乳状灰被膜
70	浅	口縁～底部	SA1	(15.6)			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線はナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
71	浅	口縁～胴部	SA1				ハケ目跡ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着
72	浅	口縁～底部	SA1	28.0			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の乳白・黄褐色片状物	スズ付着
73	浅	口縁～胴部	SA1	28.0			ナブ	縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	7ミリ以下の黄褐色・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
74	浅	口縁～底部	SA1	28.3			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は丁寧ナブ。縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	5ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
75	浅	胴部～底部	SA1		2.6		斜方向の丁寧ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は縦方向の山形押痕文・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	3ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着 内底面
76	浅	底部	SA1		3.0		縦方向のナブ	ナブ・種乳あり	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	1ミリ以下の黄褐色・赤褐色片状物	スズ付着 底面
77	浅	底部	SA1		4.4		ナブ	縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の黄褐色・赤褐色片状物	スズ付着
78	浅	口縁～胴部	SA1	(15.9)			縦線は縦方向のナブ。縦線はハケ目跡ナブ	縦線は丁寧ナブ。縦線はハケ目跡ナブ	良好	赤褐色 (Mat01934)	明褐色 (Mat01934)	2ミリ以下の黄・赤褐色片状物	スズ付着

() の値は復元による

表12 SA1出土土器観察表2

番号	器 種	観察部位	出土地点	法量 (cm)			手法・用途・文様ほか		構成	土 質		胎土の特徴	備 考
				口径	高さ	腹径	外 側	内 側		外 側	内 側		
79 甗	口縁→底面	SA1	(11.3)				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
80 甗	口縁→底面	SA1	13.0				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	ナズ	良好	黄灰	灰	3ミリ以下の赤・黒色、透明光沢	内裏施
81 底	底面→底面	SA1	2.7				ナズ	ナズ	良好	黄灰	灰	3ミリ以下の赤・黒色、透明光沢	内裏施
82 甗	口縁→底面	SA1	(11.2)	2.5	12.1		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
83 甗	口縁→底面	SA1	10.3	1.3	11.1		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒色、透明光沢	内裏施
84 甗	口縁→底面	SA1	4.2				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒色、透明光沢	内裏施
85 底	口縁→底面	SA1	(10.8)				縦方向のミガキ	ナズ	良好	黄灰	灰	2ミリ以下の赤・黒、乳白色	内裏施
86 甗	口縁→底面	SA1					ナズ	ナズ	良好	黄灰	灰	2ミリ以下の赤・黒、乳白色	内裏施
87 甗	口縁→底面	SA1	(11.7)				縦方向のミガキ	ナズ	良好	黄灰	灰	2ミリ以下の赤・黒、乳白色	内裏施
88 底	口縁	SA1	(14.3)				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
89 エニチュア甗	口縁→底面	SA1	8.0	0.9	7.1		縦方向のナズ	縦方向のナズ	良好	灰	灰	1.5ミリ以下の乳白皮	乳白状底面
90 甗	口縁→底面	SA1					縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	良好	黄灰	灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色	内裏施
91 エニチュア甗	口縁→底面	SA1	10.5	3.1	5.4		ナズ、透明光沢	ナズ、透明光沢	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色	内裏施
92 エニチュア甗	口縁→底面	SA1	7.9	3.3	6.0		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
93 鉢	口縁→底面	SA1	(21.6)		(10.8)		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
94 鉢	口縁→底面	SA1	(25.8)				縦方向のミガキ	ハケ目縁部は縦方向のミガキ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
95 鉢	口縁→底面	SA1	(25.8)				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
96 鉢	口縁→底面	SA1					口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
97 底	口縁→底面	SA1	13.7				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
98 甗	口縁→底面	SA1					口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
99 甗	口縁→底面	SA1	(8.6)				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
100 甗	口縁	SA1	(8.7)				縦・斜方向のナズ	縦・斜方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
101 複合口縁底	口縁	SA1	(16.1)				二重口縁部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
102 甗	口縁→底面	SA1	3.1				工芸による縦・斜方向のナズ	工芸による縦・斜方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
103 甗	口縁	SA1	4.1				タタキ	高化著しく透明不明	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
104 甗	口縁	SA1	3.7				タタキ	高化著しく透明不明	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
105 甗	口縁	SA1	4.0				工芸による縦方向のナズ	工芸による縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
106 甗	口縁	SA1	(1.7)				縦・斜方向のナズ	ナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
107 口縁→底面	SA1	(9.8)	(4.8)				口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
108 エニチュア甗	口縁→底面	SA1	5.5	2.7	6.2		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
109 高坪	坪部	SA1					縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
110 高坪	坪部	SA1					上は縦方向のミガキ	下は縦方向のナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施
111 高坪	坪部	SA1					ミガキ、高化著しい	ナズ	良好	灰白	黄灰	3ミリ以下の赤・黒、乳白色、透明光沢	内裏施

()の値は復元による

表13 遺構内出土土器観察表

番号	器 種	観察部位	出土地点	法量 (cm)			手法・用途・文様ほか		構成	土 質		胎土の特徴	備 考
				口径	高さ	腹径	外 側	内 側		外 側	内 側		
132 甗	口縁→底面	SC1					縦・斜方向のナズ	縦・斜方向のナズ	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
133 甗	口縁	SC1	(11.8)				工芸による斜方向のナズ	斜方向のミガキ、輪状底面	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
134 エニチュア甗	口縁→底面	SC2	5.4	0.7	4.4		口縁部は縦方向のナズ、胴部は縦方向のナズ	高坪さえ、ナズ	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
135 底	底面	SC3					胎土	胎土	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
136 底?	口縁	SC3					胎土	胎土	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
137 甗	口縁	SE7					胎土	胎土	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施
138 甗	口縁	SE7					胎土	ナズ	良好	灰白	黄灰	2ミリ以下の赤・黒、透明光沢	内裏施

()の値は復元による



西ノ別府遺跡近景（尾鈴山方面を望む）



調査区全景

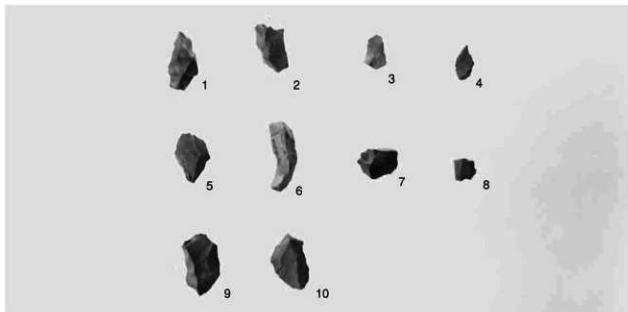
図版 2



旧石器調査区



接合資料出土状況



ナイフ形石器・剥片



接合資料



縄文時代調査区



S11



S12



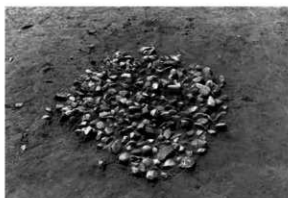
S13



S14



S15



S16

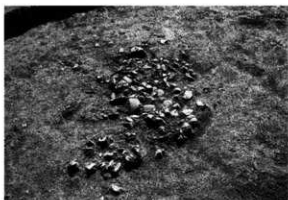


S17

图版 4



SI8



SI9



SI10



SI11



SI11配石



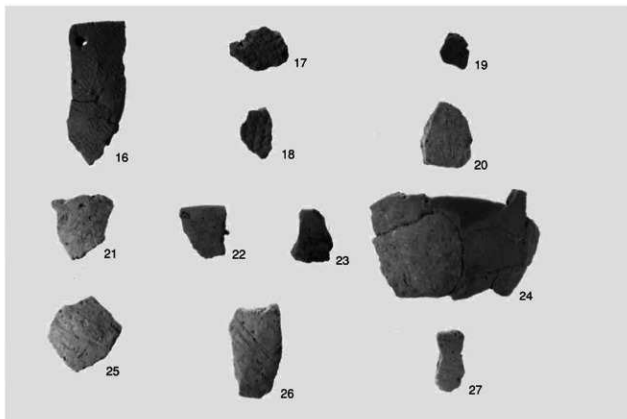
SI12



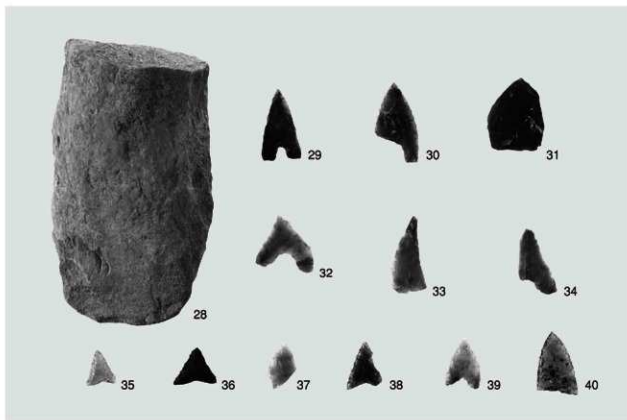
SI12配石



SI12・13



縄文時代出土土器



縄文時代出土石器



SA1 検出状況



SA1 遺物出土状況



SA1 貼床面状況



SA1 貼床面除去状況



銅鏡出土状況



住居内土坑



SC1



SC2



SA1 出土土器 42



43



44



45



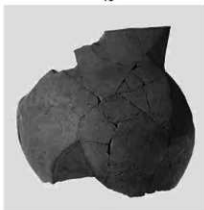
46



47



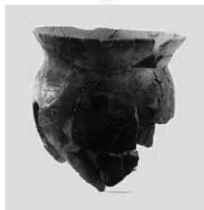
48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



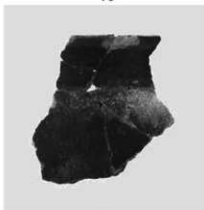
70



71



72



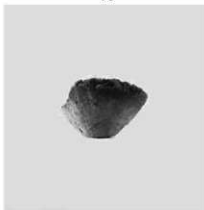
73



74



75



76



77



79



80



81



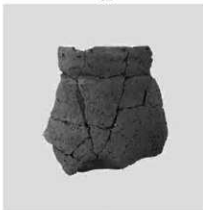
82



83



84



85



88



89



91



92



93



94



95



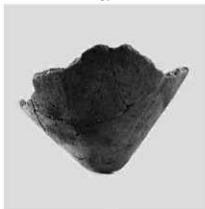
97



99



101



102



103



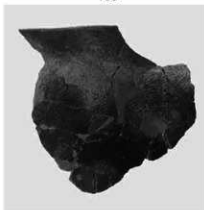
105



107



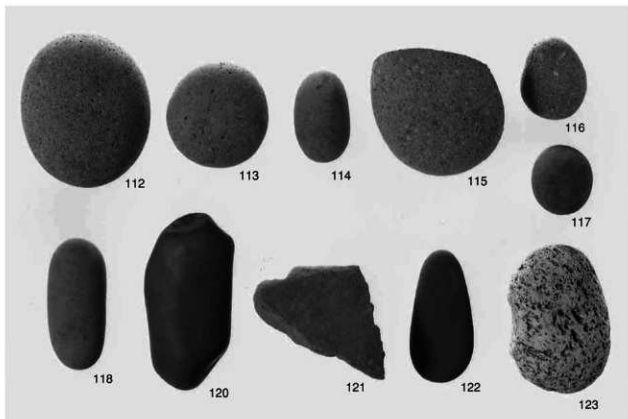
108



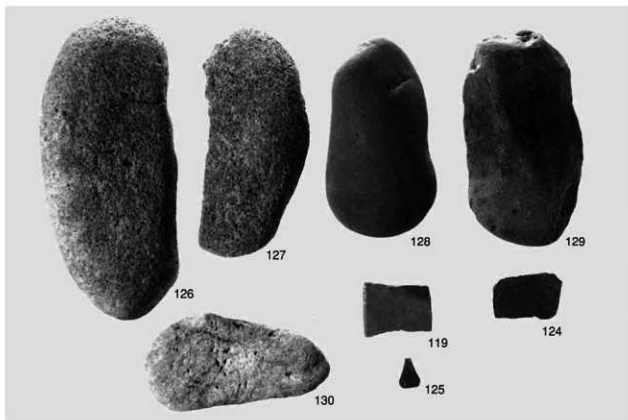
住居内土坑出土土器 41



SC2 出土土器 134



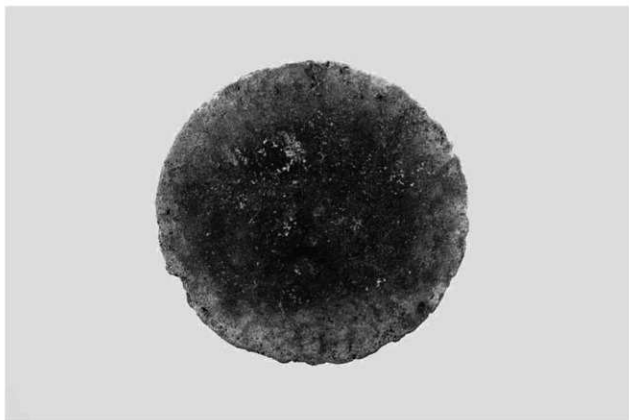
SA1出土石器 (1)



SA1出土石器 (2)



銅鏡 鏡背



銅鏡 鏡面

図版14



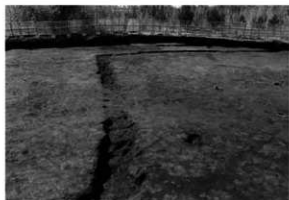
SE1・2



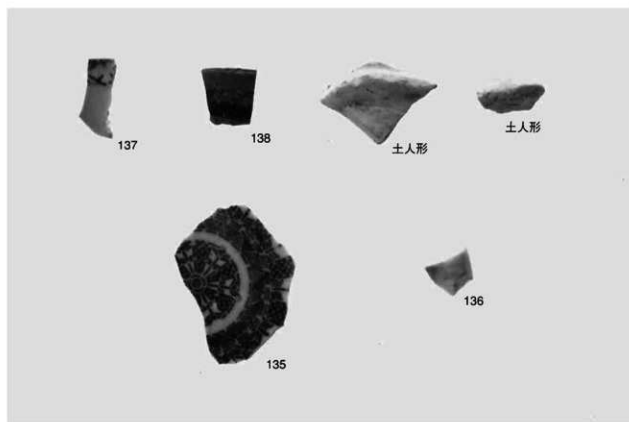
SE3~5



SE6



SE7



近世以降出土遺物